

財松江市教育文化振興事業団  
文化財調査報告書 第1集



# 釜代1号境外発掘調査報告書 I

1994年3月

松江市教育委員会  
財松江市教育文化振興事業団

財松江市教育文化振興事業団  
文化財調査報告書 第1集



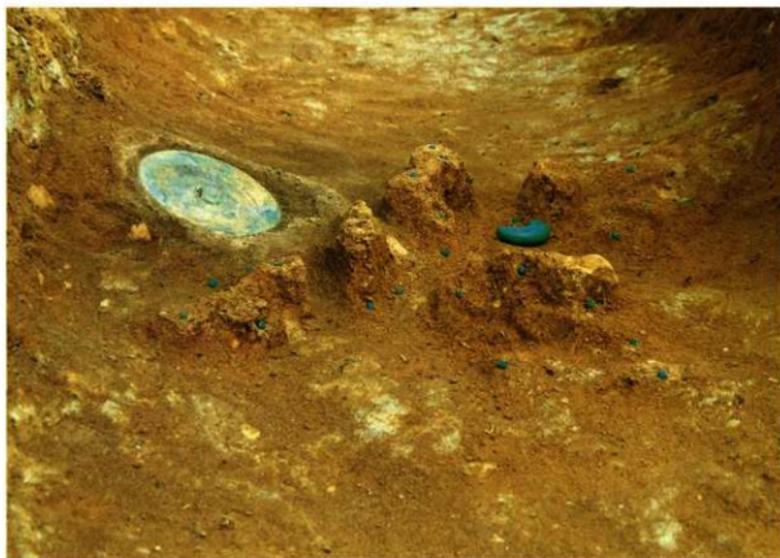
# 釜代1号境外発掘調査報告書 I

1994年3月

財松江市教育文化振興事業団



釜代1号墳第2主体部



内行花文鏡，玉類出土状況

## 序

私たちの住む松江市には、原始、古代以来の祖先の人々の生活の足跡が数多く残されています。これらの遺跡は市内で約800を数え、それは松江の歴史を雄弁に語る生き証人となっています。私たちはこれらの文化財を未来永久へと保存し、継承していかなければなりません。

とはいえ、本市におきましては近年来、開発事案件数の急増により消えてゆく遺跡も次第に増えつつあります。これらの文化財をせめて記録として留め、後世に残すために、平成5年7月、松江教育文化振興事業団に埋蔵文化財課を新設して、教育委員会との連携をはかりながら努力を続けてまいりました。

本年度においては、市内12箇所で開催調査を行い、数多くの新しい知見を得ることができました。その中でも、西浜佐陀町の釜代1号墳は県内3例目の粘土椀を持ち、青銅鏡、勾玉をはじめとする副葬品を伴う貴重な前期古墳であることがわかりました。これまで古江地区の宍道湖北岸一帯は、古墳時代中期を中心とした大規模な古墳が密集する地帯として知られてきましたが、この調査の結果、古江地区の歴史に新たな1ページを加えることができました。

また、本来は国道拡幅工事のために消滅を余儀なくされていた古墳でありましたが、幸い関係各方面の方々の絶大な努力と理解により工事計画が変更され、この古墳を現地保存することに決定したことは、文化財保護の上から誠に喜ばしい限りであります。ここに記して関係者各位に衷心より謝意を申し上げる次第であります。

最後にこの報告書が広く地域研究の資料として活用されることと、本書を読まれる方々が今後一層文化財に対する関心と理解を深められることを願って止みません。

平成6年3月

松江教育文化振興事業団

理事長 吉岡俊雄



## 例 言

1. 本書は、平成5年度において鳥根県松江土木建築事務所からの受託事業として松江市教育委員会、  
勸松江市教育文化振興事業団が実施した釜代1号墳外発掘調査にかかる報告書である。

2. 発掘調査期間 着 手 平成5年4月19日  
完 了 平成5年8月31日（合計60日）

3. 調査の組織は下記の通りである。

委託者	鳥根県松江土木建築事務所	所 長	西田 武夫
受託者	松江市代表者	松江市長	石倉 孝昭（平成5年11月まで） 宮岡 寿雄（平成5年12月から）
主体者	松江市教育委員会	教 育 長	諏訪 秀富
		生涯学習部長	中西 宏次
		文化課長	村松 榮
		文化財係長	岡崎雄二郎
実施者	勸松江市教育文化振興事業団（平成5年7月から）		
		理 事 長	吉岡 俊雄
		事務局長	日高 稔夫（埋蔵文化財課長兼務）
		埋蔵文化財課調査係長	中尾 秀信
調査者	松江市教育委員会	生涯学習部	文化課
		文化財係	主 事 飯塚 康行（平成5年4月～平成5年6月）
		嘱託員	瀬古 諒子（平成5年4月～平成5年6月）
	勸松江市教育文化振興事業団	埋蔵文化財課	
		調 査 係	調査員 飯塚 康行（平成5年7月～）
		嘱託員	富田 茂雄（平成5年7月～）

4. 勾玉の石材分析にあたっては、鳥根大学理学部助教授沢田順弘氏に依頼し、第4章第1項の原稿  
を執筆して頂いた。

5. 赤色顔料の分析にあたっては、福岡市埋蔵文化財センター本田光子氏と宮内庁正倉院事務所主任  
研究官成瀬正和氏に依頼し、第4章第2項の原稿を本田氏に執筆して頂いた。

6. 第5章第2項に掲載した県内出土鏡一覧表については、鳥根県古代文化センター主幹松本岩雄氏

の協力を得て作成した。

7. 本書に掲載した松崎古墳出土鏡の写真については、宇部市教育委員会よりフィルムへの貸与を受け、許可を得て掲載した。

8. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

〔調査指導〕 山本清（島根大学名誉教授）、池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学助教授）、勝部昭（島根県埋蔵文化財センター所長）、川原和人（島根県教育庁文化課主幹）、内田融（同文化財係長）、足立克己（同文化財係文化財保護主事）、熱田貴保（同文化財係主事）、松本岩雄（島根県古代文化センター主幹）、萩雅人（島根県埋蔵文化財センター企画調整係主事）、卜部吉博（同調査第2係主幹）、丹羽野裕（同第2係主事）、池淵俊一（同第2係主事）、今岡一三（同第2係主事）、広江耕史（同第3係主事）、柳浦俊一（同第4係主事）、平野芳英（島根県立八雲立つ風土記の丘学芸主任）

〔調査協力〕 西田武夫（島根県松江土木建築事務所所長）、村上充寛（同維持管理課長）、堀江広人（同維持管理課技師）

9. 出土遺物はすべて松江市教育委員会にて保管している。

10. 出土遺物の接合は瀬古が行い、写真撮影は飯塚、瀬古が行った。

11. 第4章を除く本書の編集及び執筆、図面の浄書等はすべて飯塚が行った。

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会(現文化庁)が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

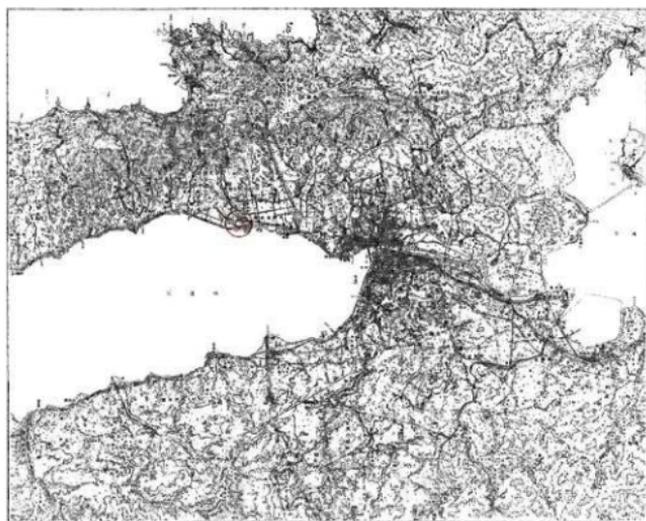
その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗拱、すなわち斗と拱の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。



文化財愛護  
シンボルマーク



島根県地図



松江市地図



# 目 次

1. 調査に至る経緯と経過	10
2. 周辺の歴史的環境	12
3. 調査の概要	
(1) A地点について	17
(2) B地点について	21
(3) C地点について	22
(4) D地点について	43
4. 自然科学分析	
(1) 釜代1号墳出土の勾玉について（沢田順弘）	44
(2) 釜代1号墳出土の赤色顔料について（本田光子・成瀬正和）	47
5. 考 察	
(1) 赤色顔料について——島根県内の墳墓における出土状況について——	52
(2) 釜代1号墳出土の内行花文鏡について	61
6. ま と め	65

# 1. 調査に至る経緯と経過

## ●経緯

釜代古墳群は宍道湖北東部の湖岸に面した丘陵上に位置し、円墳3基、方墳2基、半環2基として周知されていた古墳群である。本古墳群の位置する丘陵は北西方向に連なり、古墳時代の中期には古曾志大谷1号墳、古曾志大塚1号墳、また北方平野部には斜格子文で装飾された長持形石棺を内蔵する国指定史跡丹草庵古墳などの大型古墳が集中し、古墳時代後期には整美な造りで石棺を内蔵する北小原1号穴をはじめ、寺津横穴群などの横穴墓が多数造営されており、当地では古墳時代に有力な豪族の存在していたことが窺われる。

平成4年度において、鳥根県松江土木建築事務所が国道431号特定交通安全施設等整備工事を計画した際に、釜代1号墳及び寺津横穴群（北小原横穴群と改称する）、古墳推定地1箇所（（仮称）寺津11号墳）が計画路線区域内に含まれたため、平成5年度において発掘調査を実施することとなった。

調査の方法については、A～D地点の4箇所の丘陵尾根上及び斜面部分についてトレンチを16本設定し、遺構の有無を確認した後、遺構が確認されたトレンチについては拡張して全面発掘調査を実施することとした。発掘調査は、平成5年4月19日から平成5年8月31日までの計60日を費して実施した。

## ●経過（発掘調査日誌より）

- H 5. 4. 1 | 平成5年4月1日付松土第195号で、鳥根県松江土木建築事務所から埋蔵文化財発掘通知が提出される。
- H 5. 4. 15 | 平成5年4月15日付教文第47-1, 2号で、釜代1号墳、寺津横穴群（のちに北小原横穴群と改称）についての埋蔵文化財発掘通知を市文化課より文化庁へ提出。
- H 5. 4. 19 | おはらい、C地点釜代1号墳調査開始。
- H 5. 4. 21 | 墳頂部表土直下から鼓形器台出土、前期古墳の可能性が強くなる。
- H 5. 4. 26 | 墳頂部鼓形器台周辺に高坏、小形丸底甕が供献されていることが判明、土器を取り囲む範囲でプランが確認される。主体部か？
- H 5. 4. 28 | 土器を取り囲むプランはほぼ確定したが、不整形な長方形であり、主体部上の供献土器が落ち込んだ痕跡であると推定された。
- H 5. 5. 7 | 北側にはほぼ同規模のプランが並行して存在することが明らかとなる。ただし土器は供献されていない様子である。南側を第1主体部、北側を第2主体部と呼称することにした。
- H 5. 5. 11 | サブトレによる土層観察の結果、第2主体部は粘土層を持つことが判明した。県内ではこれが3例目の発見となる。一同歓喜！
- H 5. 5. 13 | サブトレによる土層観察の結果、第1主体部にも粘土層が存在することを確認した。なお、2つの主体部の前後関係は、第1主体部が先行、第2主体部が後出である。定

- 石通り第2主体部の調査を先行することとした。
- H 5. 5.17 墳裾部分を掘り下げるが、周濠、墳裾施設は存在しないため墳裾の把握が困難であるが、盛土の掘を追いかけて行くと楕円形墳となる。やや不安
- H 5. 5.24 C地点東側斜面の横穴推定地にトレンチT-4、T-5を設定、調査開始、鳥根大学名誉教授山本清氏現地視察、墳形については本来方墳であった可能性も考えてみる必要があるとの教示を受けた。
- H 5. 5.25 第2主体部粘土層の上面を検出。被覆粘土は既に落ち込んでいる様子である。規模は長さ5.4m、東端幅70cm、西端幅55cmであり、東側を幅広に造ってあるため、頭位は東にあったものと推定された。
- H 5. 5.27 T-4で地山の変化が見られた。横穴の存在する可能性が強くなったが思ったより下方に存在する様子であったので拡張することとした。
- H 5. 5.31 第2主体部棺内掘り下げ、午後勾玉1個、ガラス小玉1個発見
- H 5. 6. 1 T-4横穴羨門部開口、北小原3号穴と命名、開口部からの観察では、玄室内には板石の屍床らしきものが見える。
- H 5. 6. 4 松江市教育長諏訪秀富現地視察。
- H 5. 6. 7 T-5では横穴は発見されなかったため調査終了とした。
- H 5. 6. 8 C地点西側斜面の横穴推定地にT-6、7、8を設定、調査開始。
- H 5. 6.10 鳥根大学助教授渡辺貞幸氏現地視察、被覆粘土と棺床粘土の区別、排水溝の有無の確認をするようにとの教示を受けた。
- H 5. 6.11 T-6では横穴は発見されなかったため調査終了とした。
- H 5. 6.14 第2主体部棺底から内行花文鏡1面出土、鏡背部は赤色顔料の付着が認められた。これでガラス小玉は総数16個となった。
- H 5. 6.17 鏡面下には円形に木質が遺存しており、一部赤色顔料の付着が認められた。
- H 5. 6.21 T-7で前庭部と思われる地山の加工を確認、北小原4号穴と命名。第2主体部鏡、ガラス小玉取り上げ、総数67個となった。床面の赤色顔料サンプル採取、完掘写真撮影。
- 県文化課から釜代1号墳を現地保存できるように協議する必要があるとの指導を受けた。
- H 5. 6.24 B地点T-9、10設定、調査開始。
- H 5. 7. 1 勸松江市教育文化振興事業団に埋蔵文化財課を新設。発掘調査業務は事業団委託方式となったため、本事業は事業団が引き継ぐこととなった。
- H 5. 7. 2 県松江土木建築事務所、県道路課、県文化課、市文化課で取り扱いを協議、文化財側の釜代1号墳を含むC地点については現状保存することが望ましいとの意見に対して、土木側の回答は、現状保存のためにはルートを南側へ振るしかないとのことであり、新たに用地取得が可能であるかどうかについて検討するとのことであった。また、路

線変更が実現すれば、工法上B地点横穴推定地及びD地点も必然的に計画から外れるようになるとのことであった。

この時点で調査方針を変更し、路線を変更しても保存が不可能なA地点の調査を先行して行い、B地点はT-9, 10の試掘調査のみ、C地点は釜代1号墳の第2主体部の調査のみ実施し、同墳第1主体部、北小原3, 4号穴及びD地点は調査中止とすることとした。

- H 5. 7.16 B地点T-9, 10完掘, A地点寺津11号墳調査開始。
- H 5. 7.26 松江教育文化振興事業団理事長吉岡俊雄現地視察。
- H 5. 8. 4 寺津11号墳墓墳プラン検出, 掘り下げ。
- H 5. 8.11 主体部底に礫床を確認した。
- H 5. 8.23 釜代1号墳第1, 2主体部を真砂土で埋め戻し, 北小原3, 4号穴は土のうで封鎖した。
- H 5. 8.31 寺津11号墳完掘, 全調査終了。
- H 5. 9. 6 県松江土木建築事務所, 県道路課, 県文化課, 市文化課で取り扱いを協議, C地点の今後の整備については, 文化財側と土木側で今後も引き続き協議して決定することとした。
- H 5. 9.13 寺津公民館で地元関係者を対象として調査結果と路線変更について説明会を開催。
- H 5. 9.16 報道機関に調査成果の発表。

## 2. 周辺の歴史的環境

釜代古墳群(1)、北小原横穴群(2)、寺津古墳群(3)は松江西市浜佐陀町釜代及び北小原に所在する。

本遺跡群の立地は松江街地中心から西方、島根半島北山山系の朝日山の裾から宍道湖へ向かって突出する形で南東方向に舌状に延びる低丘陵上の先端部分に位置し、眼下には宍道湖が広がり、遠く大山の秀峰も望める風光明媚な場所である。また東方には『出雲国風土記』の中に見える「佐太水海」が所在し、この佐太水海から佐陀川に沿って肥沃な平野が形成され、穀倉地帯となっている。

本遺跡群が所在する丘陵地帯は、特に古墳時代中期の大型古墳が密集する地域として知られてきたが、それ以前にさかのぼる遺跡としては、縄文土期が採集された東長江町の「後谷遺跡」(25)、西浜佐陀町一帯の宍道湖沿岸の「宍道湖湖底遺跡」(45)などの散布地が知られる程度で不明な部分が多かったが、近年古曾志大谷1号墳を含む古曾志遺跡群が調査されたことにより、次第にこの地域の歴史が明らかにされることとなった。この調査の結果、「古曾志清水遺跡」(15)、「古曾志平廻田遺跡」(19)からは旧石器時代のナイフ形石器、台形礫石器が検出され、既にその頃から当地において人々の営みがあったことを窺わせる。いずれも遺構を伴わないものであることが惜しまれるが、注目される点としては、花仙山周辺産出の玉髓質メノウを石材として使用していることで、近年の調査例から

松江市周辺で出土例が見られる。また「古曾志平廻田遺跡」(19)から検出されたナイフ形石器には、瀬戸内地方からの搬入品とされたものもあり、当時から他地域との活発な交流があったことを窺わせる。縄文時代の遺跡としては先述した散布地(25, 45)の他に、「古曾志善坊遺跡」(22)では堅穴住居状遺構が発見されており、小形石匙等の石器が検出されているが、当時の人々の生活を窺うにはまだ手掛りが少ないと言わざるを得ない。これに続く弥生時代の遺跡についてもほとんど知られておらず、「古曾志清水遺跡」(15)で加工段、ピット、土壙が検出された程度で、人々の生活の跡が窺われるものの、他に見るべきものもなく、墳墓の資料に関しては皆無である。

古墳時代に入ると、本遺跡群の所在する丘陵上及び周辺でさかんに中期古墳が造営されるようになるが、「釜代1号墳」(1)が調査されるまでは前期古墳は知られていなかった。古墳時代中期には斜格子文で裝飾された長持形石棺を持ち、国指定史跡として有名な「丹筆庵古墳、一辺47m」(13)、円墳としては秋鹿町の「大垣大塚1号墳、径54m」に次いで大きな規模を持つ「古曾志大塚1号墳、径47m」(8)、墳丘はやや小規模ではあるが、割竹形石棺を内蔵し、革綴短甲片が検出されたことで知られる「大塚荒神古墳、一辺14m」(9)、そして出雲地方の前方後方墳では6番目の規模を持つ「古曾志大谷1号墳、全長45.5m」(18)などの首長墓クラスの古墳が次々と造営され、古墳時代中期において当地に強大な勢力を誇る豪族が存在していたことが知られる。

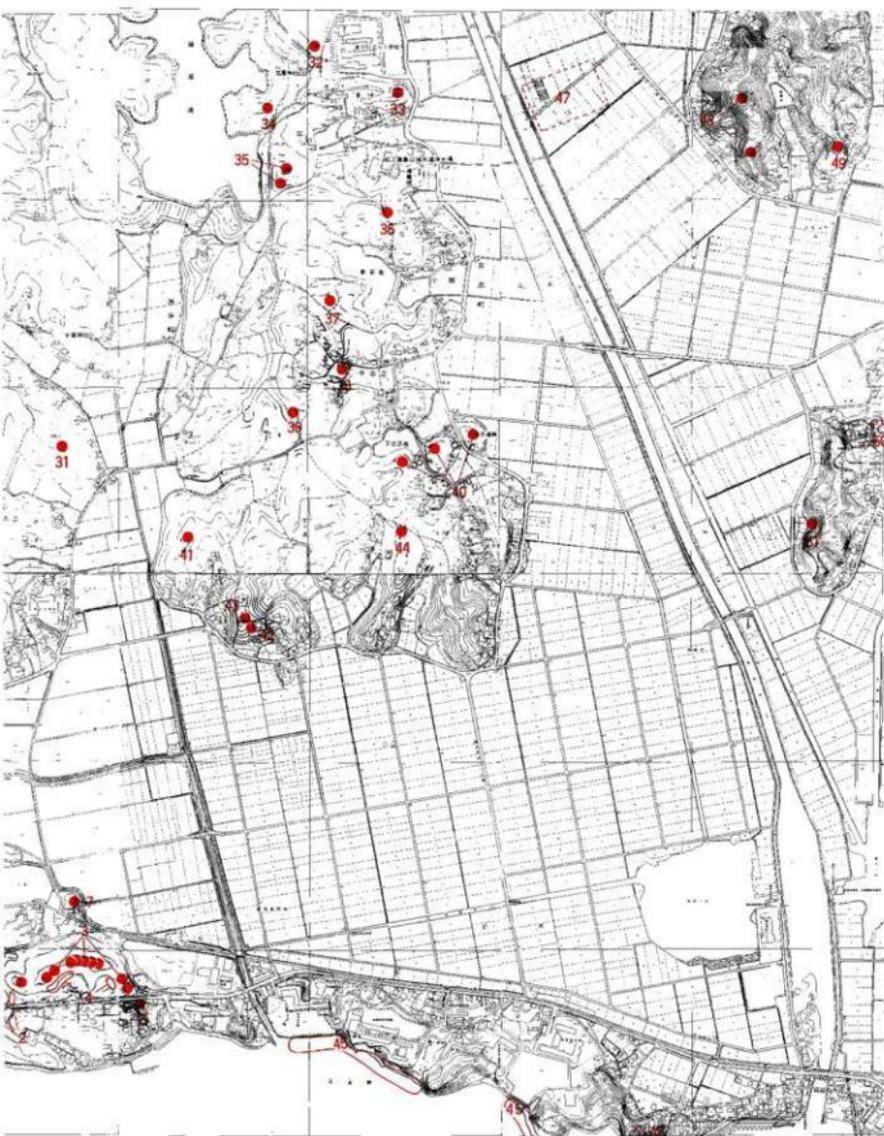
しかし古墳時代の後期になると、中期に見られたような大規模古墳は姿を消し、全長19mを測る小形の前方後方墳の「神主塚古墳」(7)が知られる程度で、この時期に大きな画期が見られ、当地はこの時期に何らかの強い規制下に置かれたかのようである。後期以降は横穴墓を中心とした造営が盛んとなり、整正家形の玄室内に石棺2基を置き、玄門を「+」状の浮き彫りのある板石で閉塞してあることで有名な「北小原横穴群」(2)をはじめ、「寺津横穴群」(4)、「寺津停留所裏横穴」(6)などが知られている。

古墳時代終末期の遺跡としては、「古曾志大谷4号墳」(18)があり、8.2×7mの小規模な山寄せの墳丘に、内法が長辺70cm、短辺35cm、高さ35cmの小規模な石棺が発見され、古墳の最後の姿を知る貴重な手掛かりとなっている。このように古墳時代中期以降の墓制の様相はかなり明確になってきているものの、人々の生活を知る上での集落の資料はいぜん少ないものである。

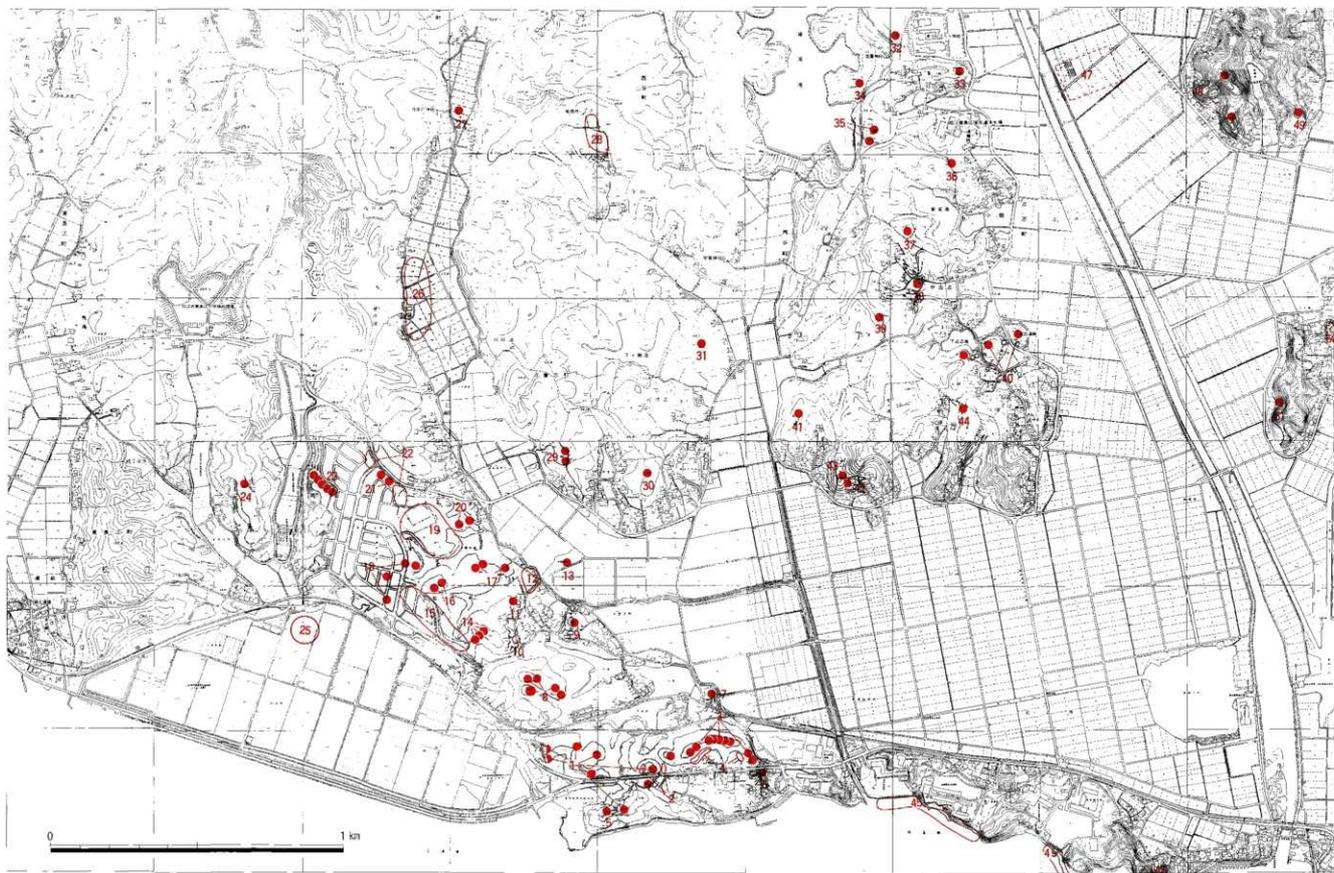
奈良時代に入ると、古曾志遺跡群の所在する丘陵の斜面を利用して加工段を穿ち、掘立柱建物を設けた形の住居跡が多く見られ、中でも「古曾志平廻田遺跡」(19)では、丘陵斜面の加工段の他に丘陵尾根筋先端上から3×2間(8.2×4.8m)、の規模を持ち、倉庫、または集会所に利用されたと考えられる掘立柱建物跡が発見されるなど、当時の集落のあり方を知る貴重な資料となっている。また当時の生業を窺わせる資料としては、西長江町の「常楽寺瓦窯跡」で出雲国分寺、四王寺に使われた瓦が焼かれており、この時期に出雲地方の中心となった意宇平野の諸寺との関連を示すものがあり、「古曾志平廻田遺跡」(19)では10世紀代の須恵器を焼いていた窯跡も3基発見され、当地の良質な粘土を利用した窯業地帯であったことが窺われる。

第1表 周辺遺跡一覧表

№	名称	所在地	種別	概要
1	釜代古墳群	西浜佐陀町	古墳群	楕円形墳(20×16m)1、粘土槨2、内行花文槨1、勾玉1、ガラス小玉57、土師器、円墳(径12-16m)2基、方墳(一辺12-14m)2基、半墳2基
2	北小原横穴群	"	横穴群	4穴以上、整正家形、石椁、(2号穴は消滅)
3	寺津古墳群	"	古墳群	円墳(径15m)1基、方墳(一辺10-12m)10基、礎床
4	寺津横穴群	"	横穴群	5穴、埋没地3穴以上、整正家形、石椁
5	釜代横穴	"	横穴	D-ム形、須恵器床
6	寺津停留所裏横穴	"	横穴	西方式妻入
7	神志塚古墳	古曾志町	古墳	前方後方墳(全長21m)
8	古曾志大塚古墳群	"	古墳群	円墳(径47m)1基、方墳(一辺8-17m)6基
9	大塚荒神古墳	"	古墳	方墳(一辺14m)、薪竹形石椁、茅葺短甲片、埴輪
10	幸神遺跡	"	敷布地	須恵器片、土師器片
11		"	古墳	不明
12	古曾志薄栄寺遺跡	"	敷布地	須恵器片、土師器片
13	丹基庵古墳	"	古墳	国指定史跡、方墳(一辺47m)、二段築成、長持形石椁、墓石、埴輪
14	古曾志ケケ谷古墳群	"	古墳群	方墳(一辺15-19m)5基、家形埴輪
15	古曾志清水遺跡	"	敷布地	加工段、土埴、ビット、石器、須恵器片
16	古曾志寺前田西古墳群	"	古墳群	方墳1基、不明1基
17	古曾志寺廻田東古墳群	"	古墳群	方墳5基
18	古曾志大谷古墳群	"	古墳群	前方後方墳(全長45m)1、基二段築成、礎床、墓石、埴輪、方墳(一辺8-9m)3基
19	古曾志平厩田遺跡	"	窯跡地	須恵器窯跡(10C)3基、加工段、獨立柱建物跡
20	古曾志平厩敷古墳群	"	古墳群	方墳2基
21	古曾志善坊古墳群	"	古墳群	方墳(一辺9m)1基、礎床、古墳残欠1基
22	古曾志善坊遺跡	"	住居跡	住居跡状遺構、加工段、石器、須恵器片
23	輪原尻古墳群	東長江町	古墳群	方墳5基
24	鎌谷古墳	"	古墳	方墳(一辺7.5m)
25	鎌谷遺跡	"	敷布地	縄文土器片、石器、須恵器片
26	窪成遺跡	古曾志町	敷布地	須恵器片
27	畑前遺跡	西谷町	敷布地	須恵器片
28	西谷上稲遺跡	"	敷布地	須恵器片
29	古曾志奥祖古墳群	古曾志町	古墳群	方墳2基(一辺8m、19m)以上
30	古曾志下祖古墳	"	古墳	不明
31	寺ヶ原古墳	西谷町	古墳	方墳(一辺11m)
32	福寄遺跡	古志町	敷布地	須恵器片、土師器片
33		"	古墳	方墳(一辺15m)
34		西谷町	古墳	方墳(一辺11m)
35	茶臼山古墳群	古志町	古墳群	円墳(径30m)1基、方墳(一辺11m)1基
36		"	古墳	方墳(一辺8m)
37		"	古墳	方墳(25×22m)
38	中古志遺跡	"	敷布地	
39		"	古墳	方墳(一辺6m)
40	ちよう塚古墳群	"	古墳群	方墳(21×15m、13×8m)2基、円墳1基
41	夷原敷重山古墳群	西谷町	古墳群	方墳(一辺12m)、箱式石椁
42	藤敷古墳群	"	古墳群	方墳(一辺16m)2基、五輪塔
43	小曾保宅北方古墳	"	古墳	消滅
44	下古志古墳	古志町	敷布地	方墳(一辺13m)
45	穴道湖底遺跡	西浜佐陀町	敷布地	縄文土器
46	濃羅寺城跡	"	城跡	平山城
47	佐陀川流域采理制遺跡	西生馬町	采理制	消滅
48	舊美山古墳群	下佐陀町	古墳群	円墳1基、墳形不明1基(石椁)
49	松塚古墳群	"	古墳群	方墳2基、円墳1基
50	高柳城跡	高津町	城跡	山城
51	船津横穴群	"	横穴群	4穴以上、須恵器片



遺跡分布図



第3図 周辺の遺跡分布図

### 3. 調査の概要

#### (1) A地点（寺津11号墳）の調査

南北に延びる低丘陵の突端部分で標高約25mを測る。この地点に南北10.5m、東西9m、高さ約1mを測る略方形のマウンドが認められ、南北方向に4.5×2mのトレンチ（T-12）を設定して掘り下げた。その結果、人為的な盛土が認められ、古墳であることが判明したため、調査区域を拡張して全面発掘調査を実施した。なお、工事境界線は古墳中央部を東西に横断するため、調査対象としたのは墳丘南半分のみである。

#### ●墳丘構造

調査の結果、築造当初は南北10m、東西8.5m、最大盛土高0.6m、墳裾からの比高約1mを測る隅丸長方形の古墳であることがわかった。築造方法としては、丘陵尾根筋の自然地形を利用して墳丘基盤を形成し、古墳区画外の地山を削って盛土としており、盛土中には地山のものと思われる白色ブロックの混入が見られる。南辺部及び東西辺には周濠は確認されず、北接する寺津10号墳との間には凹状になった地形が観察されるため、北辺部のみ周濠で区画しているものと推定される。なお、墳丘盛土中及び墳裾からの出土遺物は全くなかった。

#### ●主体部について

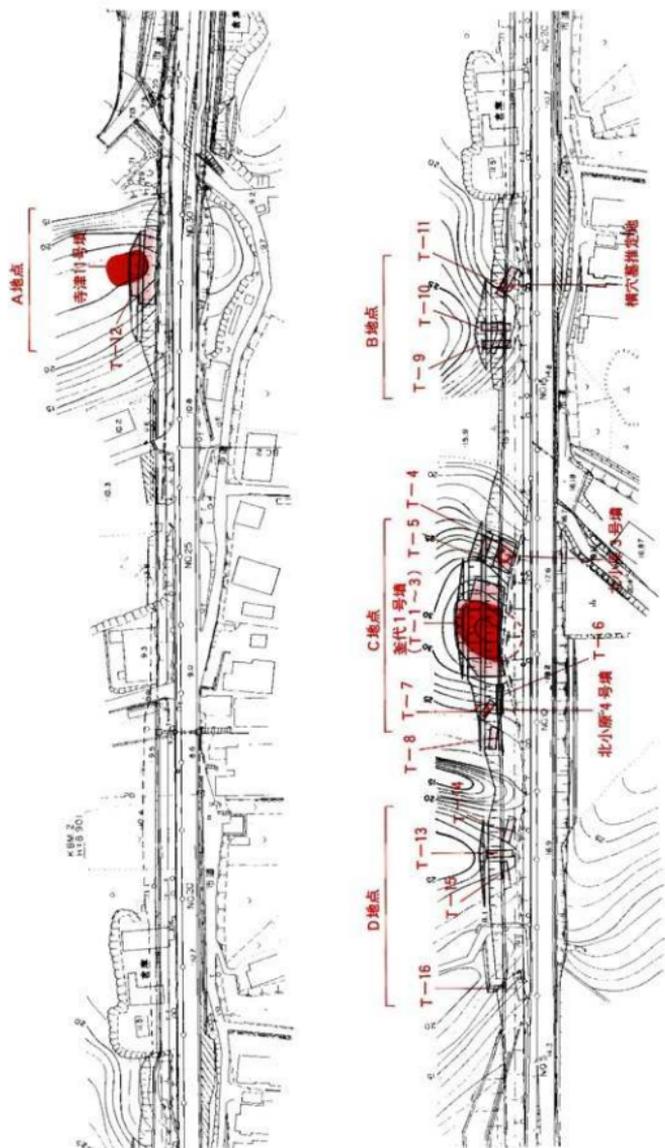
墳丘中心部分の表土を約20cm掘り下げた段階で、墳丘長軸方向と直交する形で東西3.45m、南北1.7mを測る長方形の墓壇が検出された。この墓壇は盛土上から掘り込まれており、墓壇内埋土は周囲の盛土に比べて更に多量の地山ブロックを含んでいた。

この墓壇を掘り下げた結果、深さ35cmの墓壇底で礎床が検出された。この礎床は墓壇の長軸方向に合わせて東西2.3m、南北0.35～0.45mの範囲で敷かれており、直径2cm～5cm程度の丸い石（河原石？）を使用している。この礎床は、西端部に比べて東端部を高く造っており、東端から20cmの地点では頭部が納まるかのように凹状に礎が敷かれているため、元来東に頭位を置いていたものと推定される。

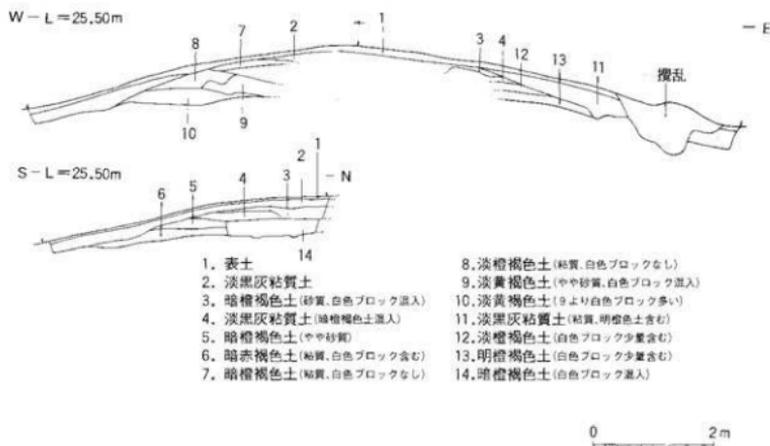
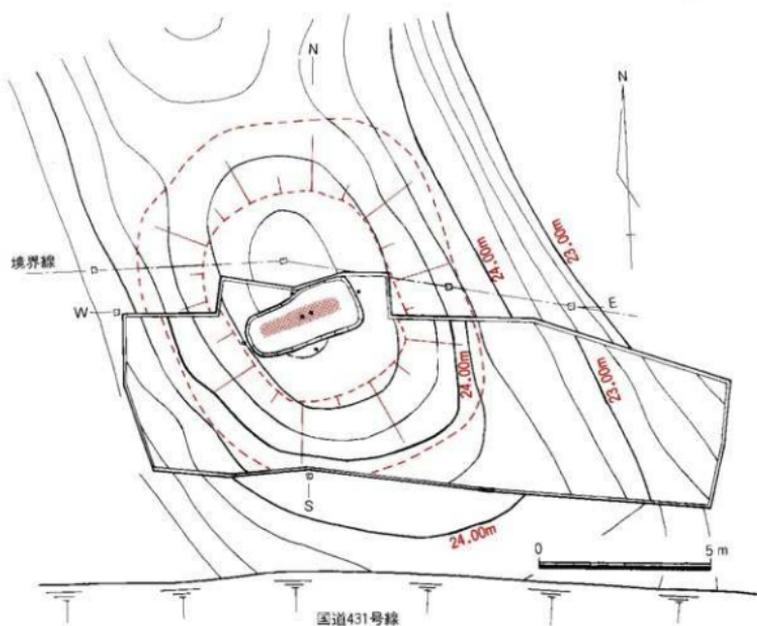
また、この礎床を取り囲む東西2.5m、南北0.7～0.8mの範囲で若干の掘り込みが認められ、埋葬当初はこの掘り込みに板材を立てて木棺椁にしていた可能性が考えられる。なお、この墓壇中及び礎床上からは全く遺物が検出されなかった。

#### ●築造年代

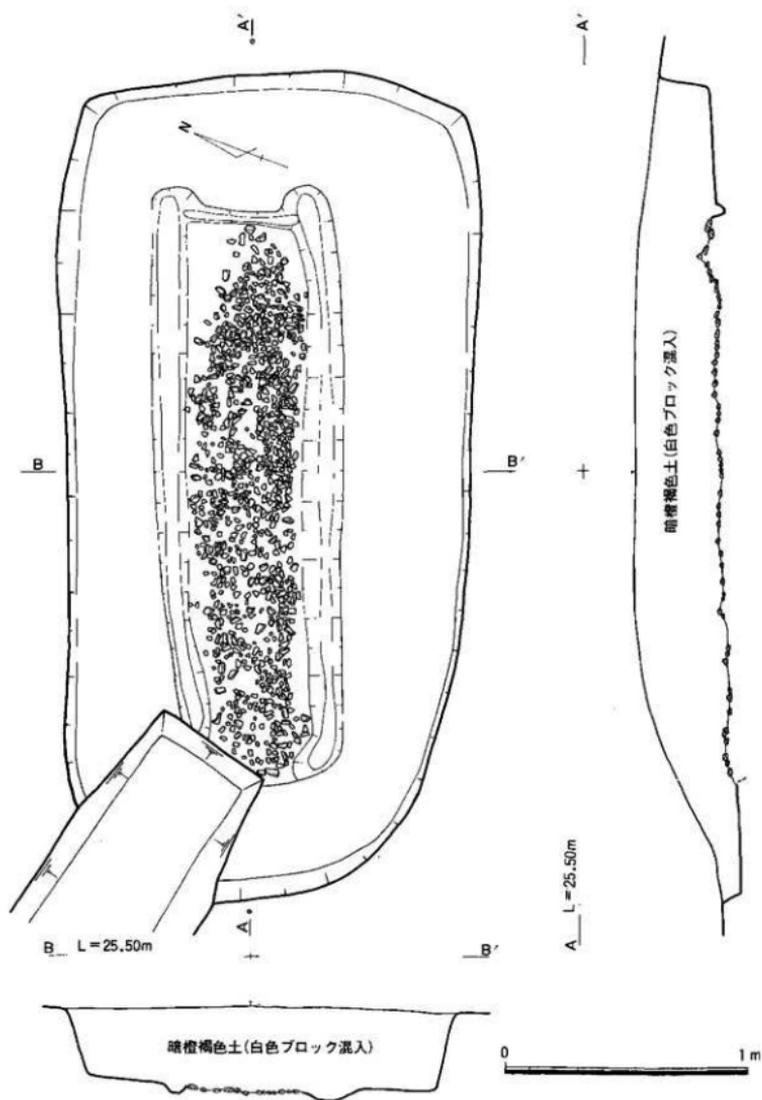
今回の調査では本墳に伴う出土遺物は皆無であったために、築造年代を決定する手掛かりはないが、本墳の主体部に見られる礎床は、出雲地方では古墳時代前期～中期にかけて見られる当地方特有のものであり、古墳の群集が見られるようになる古墳時代中期頃の築造のものと推定される。



第4図 調査区設定図 (S=1/1000×70%)



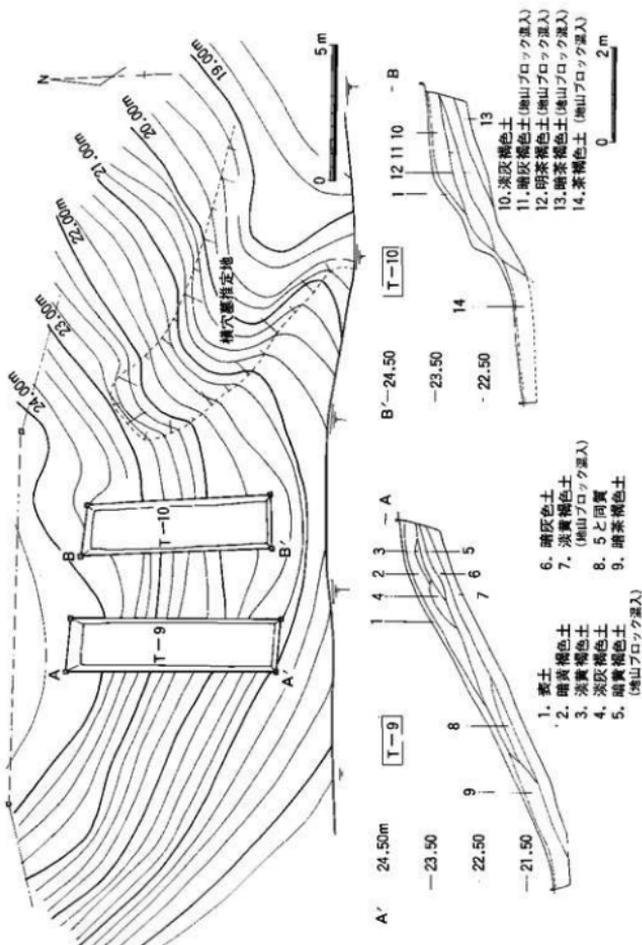
第5図 A地点寺津11号墳調査成果図



第6図 A地点寺津11号墳主体部実測図 (S=1/20)

## (2) B地点の調査

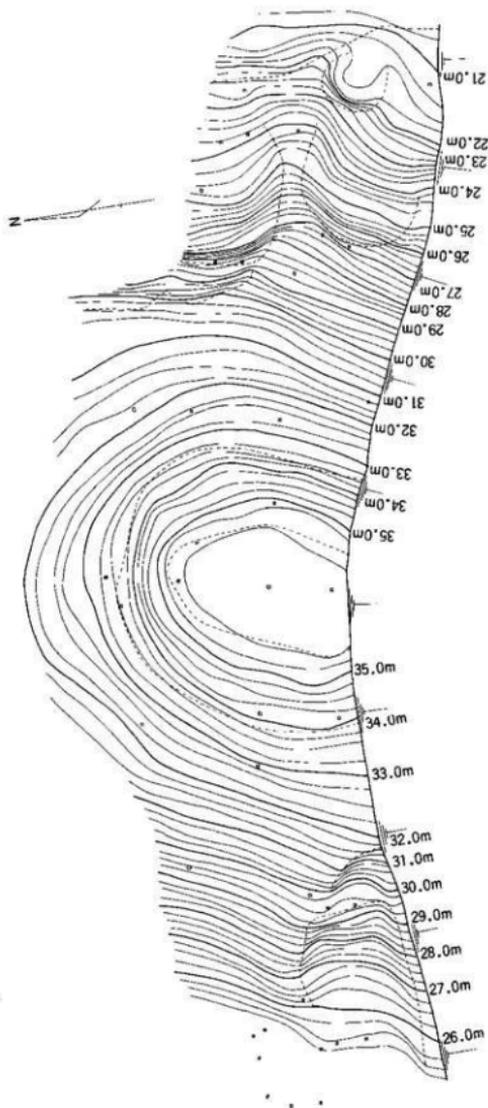
東西方向に走る丘陵が一部南側に張り出し、突出した部分で標高24mを測る南向きの斜面である。この斜面に南北方向に8×2m(T-9)、6.5×2m(T-10)の2本のトレンチを設定して掘り下げた。その結果、T-9、T-10ともに流入土は認められたものの、地山面に遺構はなく、また出土遺物も全く検出されなかった。また、T-10の東側には長軸方向を北西-南東に取る凹状の地形が観察され、横穴墓が存在するものと考えられるが、工事対象外となったために未調査である。



第7図 B地点調査成果図

### (3) C地点の調査

A～D地点の中で最も標高が高く、標高35mを測る丘陵である。この丘陵上には釜代1号墳が存在し、東西両斜面には横穴墓が存在するものと推定される凹状を呈した地形が合計3箇所認められる。この丘陵上にT-1～T-3、東斜面にT-4、5西斜面にT-6～T-8を設定して調査した。その結果、T-1～T-3では釜代1号墳、T-4では北小原3号穴、T-7では北小原4号穴が検出された。また、T-5、T-6は全く遺構は検出されなかった。T-8については未調査である。



第8図 C地点調査前地形測量図 (S=1/300)

### ① 釜代1号墳について

T-1～3について調査した結果、古墳であることが確認されたため、範囲を拡張して全面発掘調査を実施することとした。

#### ●墳丘構造

釜代1号墳は、群中最高所、標高35mの丘陵上に位置し、国道敷設時に墳丘南端が削平されているが、復元すると長軸方向約20m、短軸方向16m、最大盛土高1m、墳裾からの比高2.5mを測る楕円形の中規模古墳である。なお、長軸方向は磁北から約25°東へ振っているが、これは地形の制約によるものであると考えられる。

現時点までの調査結果では、本墳の墳頂部には墳丘長軸方向に直交する形で2基の主体部が存在することが判明している。2基の主体部の時期的な前後関係は、土層の状況から見て、まず第1主体部を地山面から掘り込む形で造り、一度墳丘を完成させた後、第2主体部を墳頂から地山に至るまで掘り込んで造ったことが窺われるため、第1主体部が先行して造営され、本墳の中心主体であることが推測される。

#### ●第1主体部

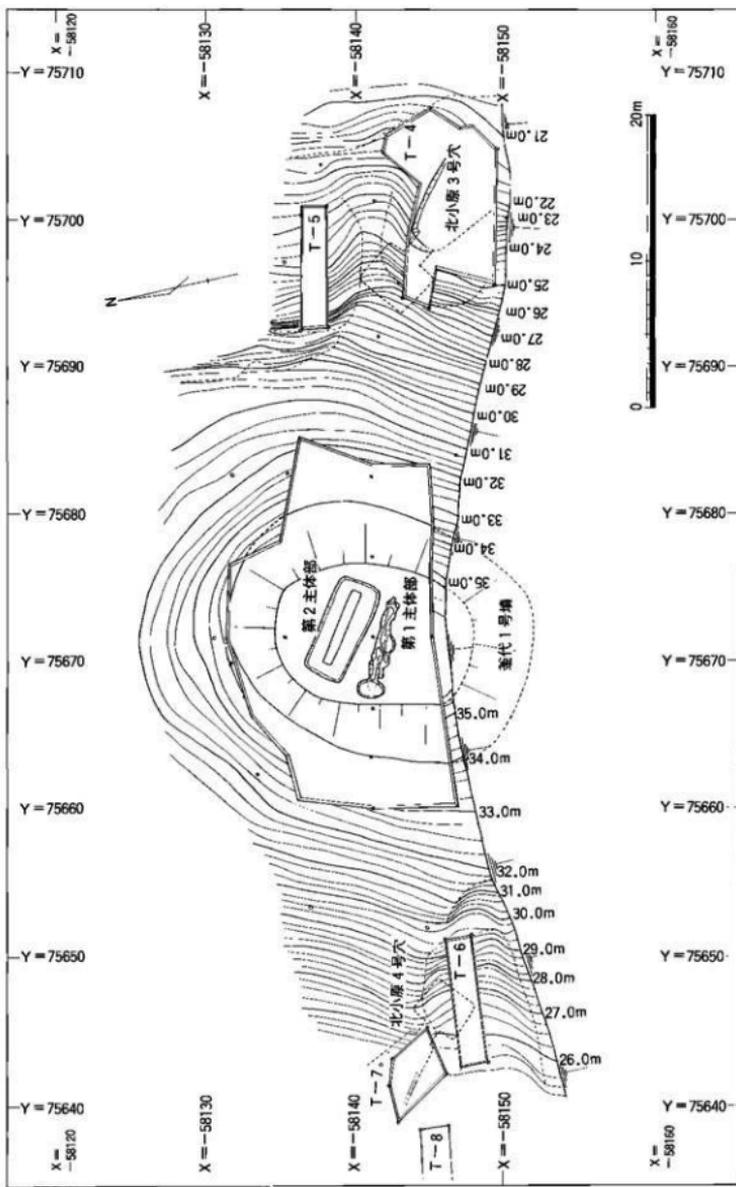
表土を取り除いた段階で長さ6m、幅0.7～1.3mの不整形な落ち込みが検出され、埋土中から古墳時代前期（小谷式）の鼓形器台2個体、高杯約6個体、小形丸底壺1個体、直口壺2個体が出土した。これらの土器は主体部直上に供献された土器群であるものと考えられ、直下に納めた木棺が腐朽した際に落ち込んだものと考えられる。

内部主体は未調査であるが、サブトレンチによる調査の結果、内部構造に粘土層を持つものであることが判明している。

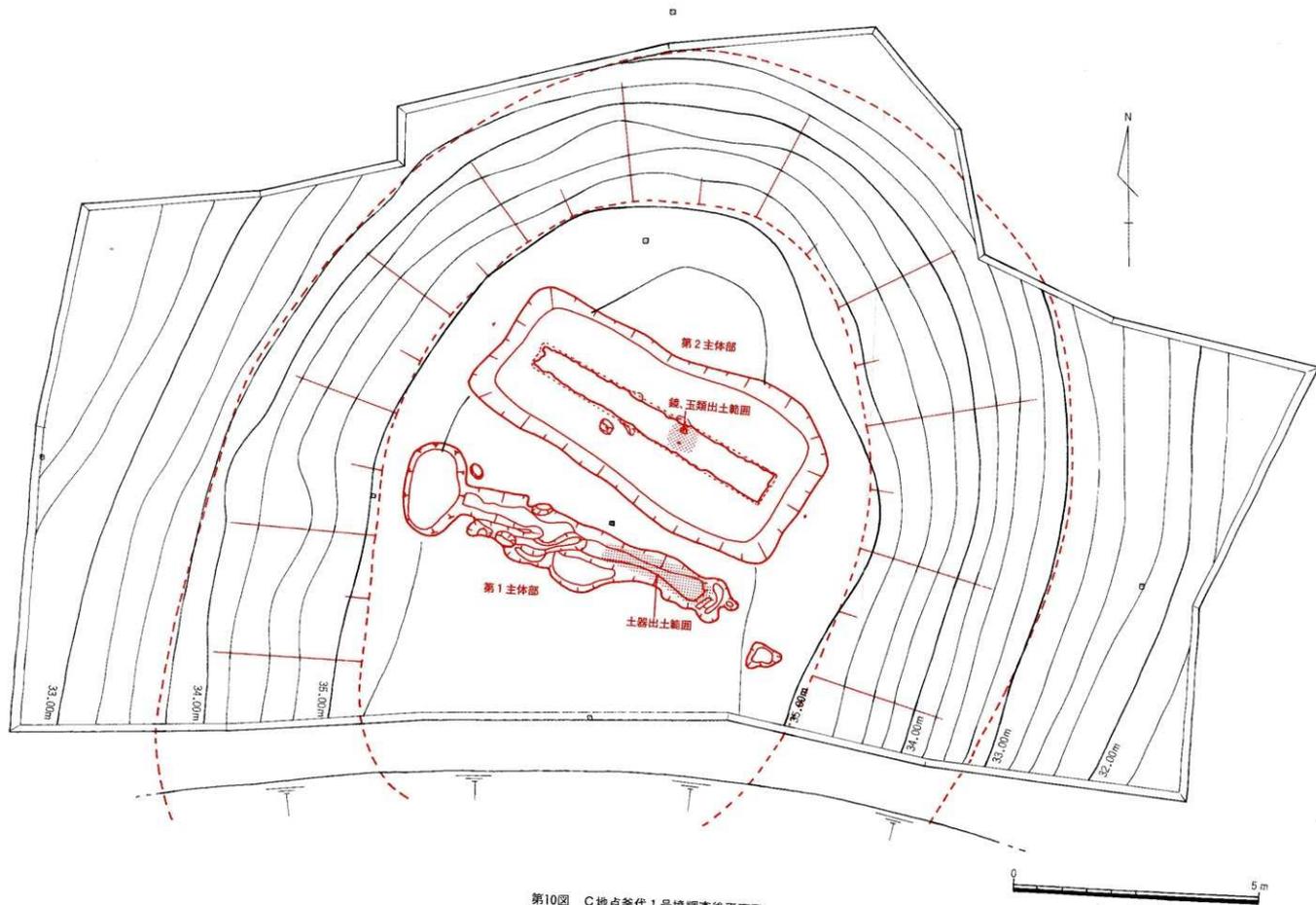
#### ●出土遺物

第1主体部からの出土遺物は須恵器片以外はすべて主体部直上の落ち込み土中から検出されたものである（第12図）。

N1は口径28.6cm、底径25.8cm、筒部外径9.0cm、器高15.8cmを測る大型の鼓形器台である。出土時点では口縁帯部と底縁帯部が天地逆転して検出された。しかし供献後に土器は墓壙内に落ち込んだ様子は見られるものの、破片の散乱はなかったので、ほぼ原位置を保っているものと思われる。形態の特徴としては口縁帯部および底縁帯部はゆるやかに「ハ」字状に開いて端部をまるくおさめる。筒部との接合部外面には退化した鈍い稜が見られる。特筆すべき点としては、底帯部に2個1組の円形の小孔を3ヶ所に穿ち、いずれも貫通させている点で、この小孔は口縁帯部にも1ヶ所見られるが、このうち1方は貫通せずに途中で止め、もう1方は穿孔しかけたか、穿孔後に粘土で充填したかのような痕跡が認められる。このような2個1組の円孔透かしを鼓形器台に施す例としては、鹿島町南講武草田遺跡F-3区出土例<sup>(註1)</sup>がある。調整の手法としては、底縁部外面はヨコナデで仕上げるが、それ



第9图 C地点调查後全体图



第10图 C地点釜代1号墳調査後平面図

以外の底縁部内面および口縁部内外面は刷毛目で仕上げる。ただし口縁部縁部内面には、一部ケズリを施したかのような砂粒の動きも観察される。

No 2, 3は口径14.3cm, 底径11.0cmを測る高坏である。出土時には坏部と脚部が離れた位置から検出されたが、同一個体であるものと考えられ、接合した場合の器高は13.2cmとなる。器厚はうすい。形態の特徴としては、坏底部からゆるやかに開いて立ち上がり、端部付近でわずかに外反する。脚部はゆるやかに開く筒部の後に裾部に至って大きく「ハ」字状にひろく。坏部と脚部の接合部内面は、うすく粘土で充填し、径5mmの小孔が見られる。調整の手法としては、脚裾部外面に一部刷毛目が見られるものの、それ以外の部分については風化が著しく不明である。

No 4は底径11.3cm（復元径）を測る高坏である。主体部直上落ち込み土中最東端部で横倒しとなった状態で検出された。口縁部までの復元は不可能であったが、器厚はうすく、No 3とほぼ同じ形態を持つものである。調整の手法については風化が著しく不明である。

No 5は復元径14.4cmを測る高坏坏部である。坏底部以下を失っているが、No 6と接合する可能性が考えられるものである。器厚はうすく、坏部は底部から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がり、端部付近でやや外反気味に開く。調整の手法は不明であるが、坏部外面はヨコナデで仕上げたように見受けられる。

No 6は高坏脚部である。坏口縁部と脚部部を失っており、原形は不明であるが、No 5と接合する可能性が考えられるものである。坏部と脚部の接合部内面には粘土が充填されており、径5mmの小孔が見られる。

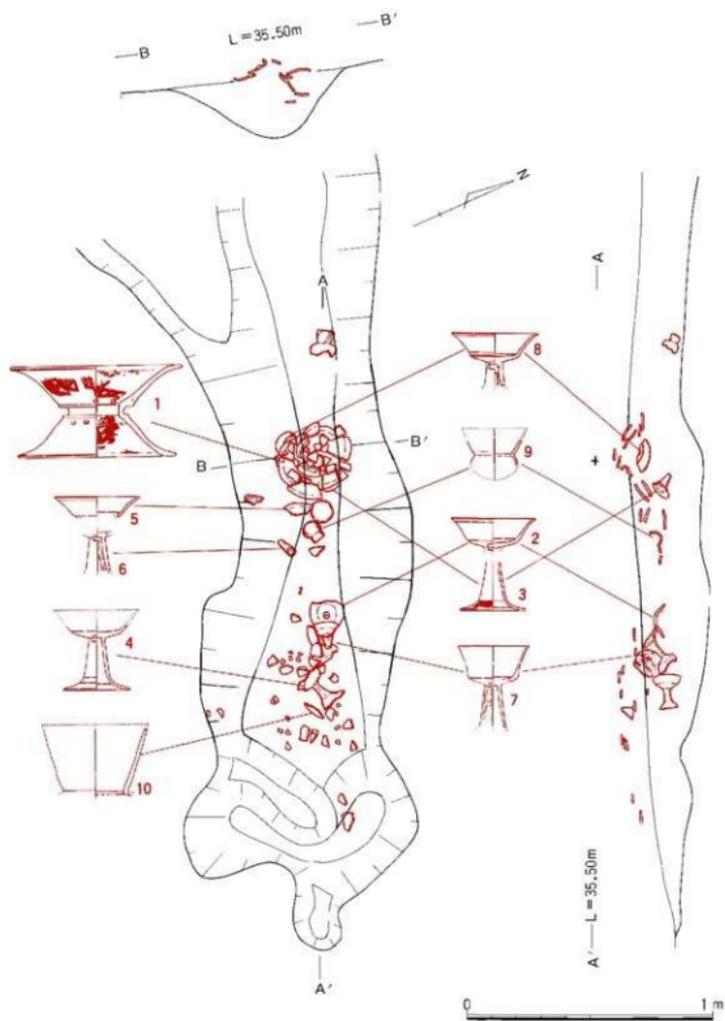
No 7は復元径11.8cmを測る高坏坏部である。深めの坏部からやや直立気味に立ち上がり、外傾して延びるが、あまり開かないまま口縁部に至る。坏部と脚部の接合部内面には粘土の充填が見られ、径5mmの小孔が見られる。調整の手法としては、脚部外面にタテ方向にミガキが見られるが、坏部は不明である。

No 8は口径14.6cmを測る高坏である。主体部直上の落ち込み土中から検出されたが、No 1 数形器台の下方で坏部を伏せた形で検出された。形態の特徴としては器厚はうすく、坏底部と口縁部の接合部は屈曲し、外面にするどい稜が見られる。坏部と脚部の接合部内面では、粘土の充填が厚く見られ、径1cmの凹状の孔が見られる。調整の手法は内外面共に不明であるが、恐らくミガキがヨコナデで仕上げられたものと考えられる。

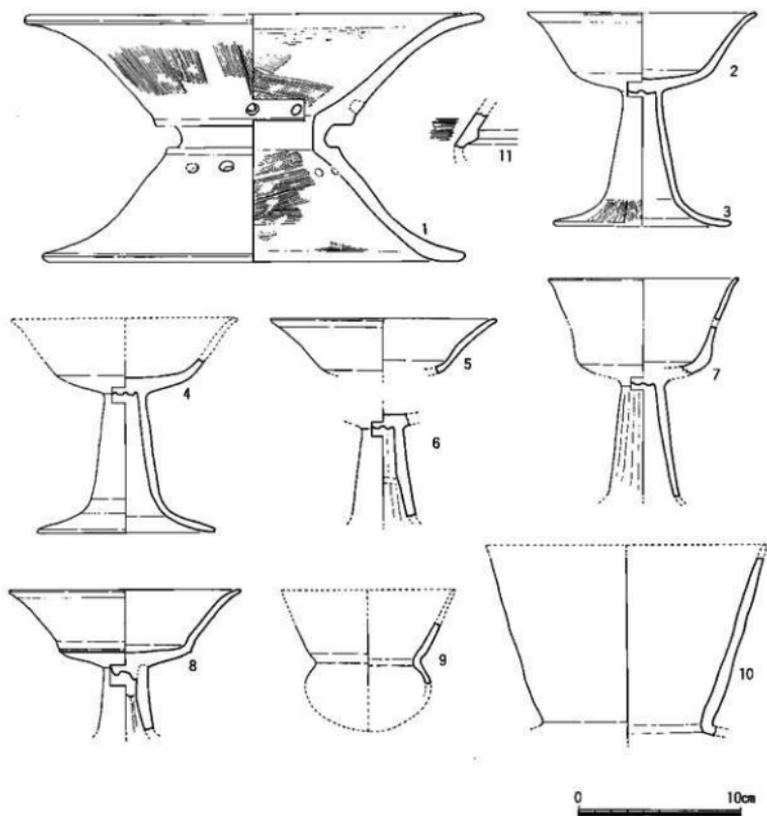
No 9は小形丸底壺の破片である。出土時には横転した状態で出土し、器体の縦半分のみが残存していたが、風化が著しく、取り上げが困難であり、口縁部と底部は細片となってしまったために接合が不可能であったが、形態の特徴としては直線的に開きながら長く延びる口縁部を持ち、胴部はやや小型の器種である。調整の手法は不明である。

No 10は直口壺の口縁部破片である。直線的に開きながら長く延びる口縁部で、かなり大型の製品であったものと考えられる。風化が著しく、器表面の剝離も見られ、調整の手法は不明である。なお、胴部の破片も残存していたが、口縁部と接合することはできなかった。

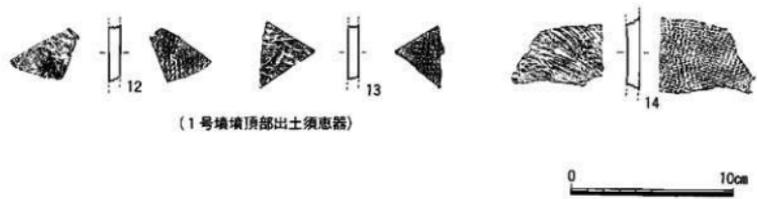
No 11は数形器台の破片で、No 1の器台とは別個体のものである。接合する破片が見当たらなかった



第11图 第1主体部直上土器出土状况 (S=1/20)

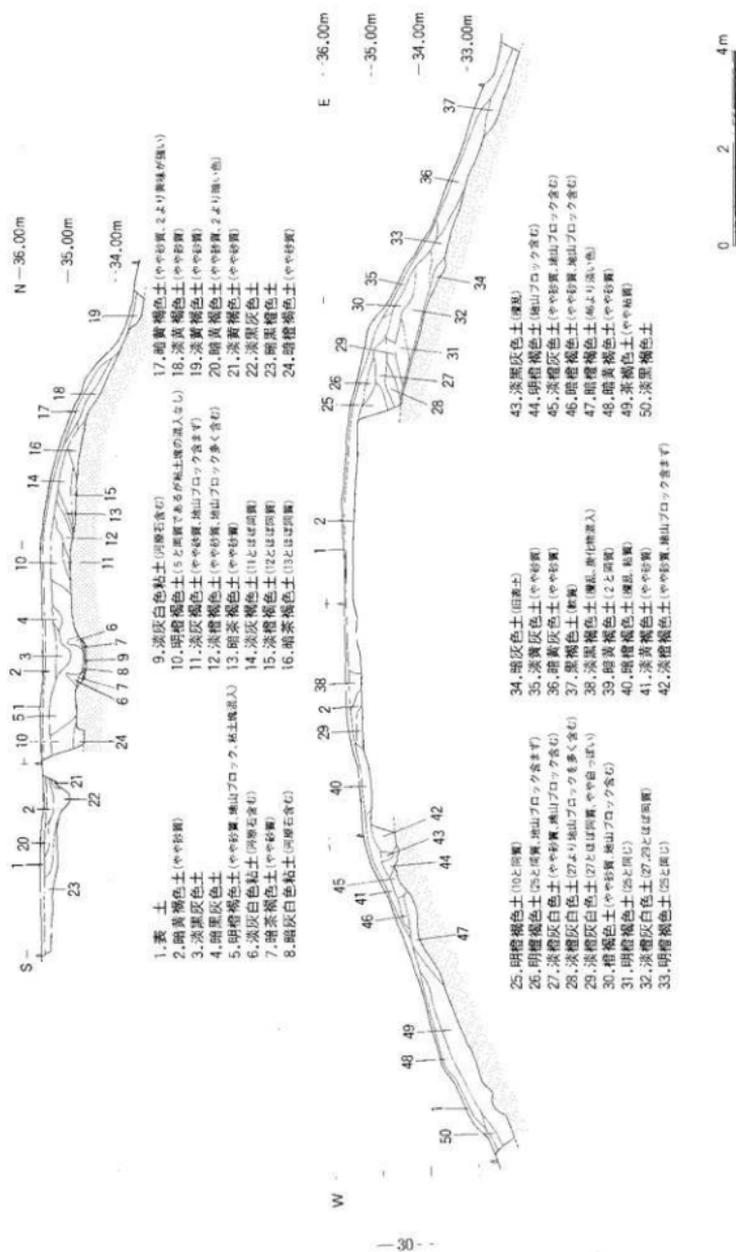


(第1主体部落达埋土中出土土器)



(1号墳頂部出土須惠器)

第12图 第1主体部出土遺物



1. 赤土  
2. 暗黄褐色土 (やや砂質)  
3. 淡黄灰色土  
4. 暗重灰色土  
5. 明橙褐色土 (やや砂質、地山ブロック含む)  
6. 淡灰白色粘土 (河原土含む)  
7. 暗茶褐色土 (やや砂質)  
8. 暗灰白色粘土 (河原土含む)  
9. 淡灰白色粘土 (河原土含む)  
10. 明橙褐色土 (ほとんど河原土であるが粘土層の混入もあり)  
11. 淡黄褐色土 (やや砂質、地山ブロック含む)  
12. 淡重褐色土 (やや砂質、地山ブロック多く含む)  
13. 暗茶褐色土 (やや砂質)  
14. 淡灰褐色土 (ほとんど河原土)  
15. 淡黄褐色土 (ほとんど河原土)  
16. 暗茶褐色土 (ほとんど河原土)  
17. 暗黄褐色土 (やや砂質、より黒味が強い)  
18. 淡黄褐色土 (やや砂質)  
19. 淡黄褐色土 (やや砂質)  
20. 暗黄褐色土 (やや砂質、より黒い色)  
21. 淡黄褐色土 (やや砂質)  
22. 淡重灰色土  
23. 暗重灰色土  
24. 暗橙褐色土 (やや砂質)

25. 明橙褐色土 (ほとんど河原土)  
26. 明橙褐色土 (ほとんど河原土、地山ブロック含む)  
27. 淡重灰白色土 (やや砂質、地山ブロック多く含む)  
28. 淡重灰白色土 (ほとんど河原土、地山ブロック多く含む)  
29. 淡重灰白色土 (ほとんど河原土、やや白っぽい色)  
30. 明橙褐色土 (やや砂質、地山ブロック含む)  
31. 明橙褐色土 (ほとんど河原土)  
32. 淡重灰白色土 (ほとんど河原土)  
33. 明橙褐色土 (ほとんど河原土)  
34. 暗灰褐色土 (河原土)  
35. 淡黄灰色土 (やや砂質)  
36. 暗黄灰色土 (やや砂質)  
37. 淡重褐色土 (河原土)  
38. 淡重褐色土 (河原土、河原土含む)  
39. 暗黄褐色土 (ほとんど河原土)  
40. 明橙褐色土 (河原土、粘土層)  
41. 淡黄褐色土 (やや砂質)  
42. 淡重褐色土 (やや砂質、地山ブロック含む)  
43. 淡重灰色土 (河原土)  
44. 明橙褐色土 (地山ブロック含む)  
45. 淡重灰色土 (やや砂質、地山ブロック含む)  
46. 暗重褐色土 (やや砂質、地山ブロック含む)  
47. 暗重褐色土 (ほとんど河原土)  
48. 暗黄褐色土 (やや砂質)  
49. 茶褐色土 (やや砂質)  
50. 淡重褐色土

第13図 さいたま1号埋立断面図 (S=1/100)

が、同じ筒部の破片が他にもう1片ある。調整の手法は外面はヨコナデ、内面は横方向の刷毛目が見られる。

No12, 13, 14は1号墳表土直下から検出された須恵器壺類片である。いずれも細片となっているが、本墳と直接関連する遺物ではないようである。

また、この他に小型の直口壺が1個体検出されたが、土器が軟質化しており、取り上げ時に細片となったために遺物整理時点での接合は不可能であった(PL-2参照)。現場での観察によると、最大胴部径約11cm、器厚2mmを測り、口縁部の高さは約5cm、口径約8cm前後のものであった。また、やや張り気味の肩部から少し下った位置には6mmの円孔が2個、約3cmの間隔をおいて穿たれていた。この器種で胴部に穿孔された例はあまり知られていないが、2個1組の穿孔は鼓形器台(No1)に見られた特徴と共通するため、同一工人による供献土器用の装飾であることが考えられる。

注1)「南壽武草田遺跡」(溝武地区景観面構整備事業発掘調査報告書5)1992年、58頁第53図

## ●第2主体部

表土を取り除いた段階で長さ6m、幅0.6~0.8mを測る不整形な落ち込みが検出された。第1主体部同様、内部の木棺が腐朽した際に落ち込んだ埋土であることが推測されるが、埋土中から遺物は全く検出されなかった。また、この落ち込みを検出した同レベルにおいて、長さ6.8m、幅2.8~3.5mを測る長方形の墓壇が検出され、墓壇内部には地山ブロックを含む明橙褐色の埋土に混じって粘土塊が散布していた。

また墓壇検出面ではビットを検出した。これらのビットのうち、掘り上げた結果樹木根痕と思われるものもあったが、規格性を持って配置されたと思われるビットを抽出したものがP-1~P-4である(第14図)。ビット上端部径15~30cm、下部径10~18cm、深さ18~20cmを測る小規模なものである。これらの4個のビットは主体部木棺を中心に置いて、それを取り囲むように四方に配置されている。これらを結んだ線はほぼ正方形となり、ビットの間隔は2.1~2.4mとなる。このような主体部に配されるビットの類例としては出雲市西谷3号墓第4主体部に見られ、「葬祭段」として埋葬後の祭儀<sup>(註1)</sup>に関わるものと推定されているが、本墳の場合は西谷例の直径1mのビットに比べて規模があまりに貧弱であり、とても覆屋を支えるものとは考えられないが、葬送、即位儀礼に関わる祭祀道具を建てた痕跡とは考えられないだろうか。

この墓壇を掘り下げた結果、内部には長さ5.4mを測る粘土椀が検出された。粘土椀底部はU字形を呈しており、椀内には割竹形木棺が納められていたものと推察される。粘土椀の幅は東辺が0.7m、西辺が0.55mを測り、東辺を幅広に造っているため頭位が東にあったことを窺わせるものである。なお、床面のレベルはほぼ水平であった。

この粘土椀の造り方は(第16図)、まず墓壇を墳丘上から地山面に至るまで掘り下げ、椀底は木棺が納まる部分をU字形に掘り込む。そこに均一に薄く灰白色の粘土を貼り付け(棺床粘土)、木棺を安置した後、椀側を一部暗茶褐色の土で固定し、更に椀側から椀上にかけて椀床に使用したものと同

じ粘土で被覆する（被覆粘土）という方法であったものと推測される。粘土の使い方は、サブトレ土層断面の観察によると棺底部では薄く1cm程度を敷き、棺側部や下部分で最も厚く最大約20cmを測る。そこから棺上部へ向かってはまた薄くなり、断面最大胴部径を測る位置では5cm程度となる。棺上部の粘土の厚さは推定の域を出ないが、棺内に落ち込んだ被覆粘土の堆積状況を見ると、棺底部と同じく1cm程度であったものと推定される。

粘土槨に使った粘土はやや灰色がかった白色を呈していたが、粘土中には小指先程度の大きさの丸い河原石が若干混入していた。また、この粘土は粘土槨が断面最大胴部径を測るレベル（棺蓋と棺身を合わせる位置）と同レベル上の槨本体から南へ約10cm離れた地点で人頭大の塊となって検出された。

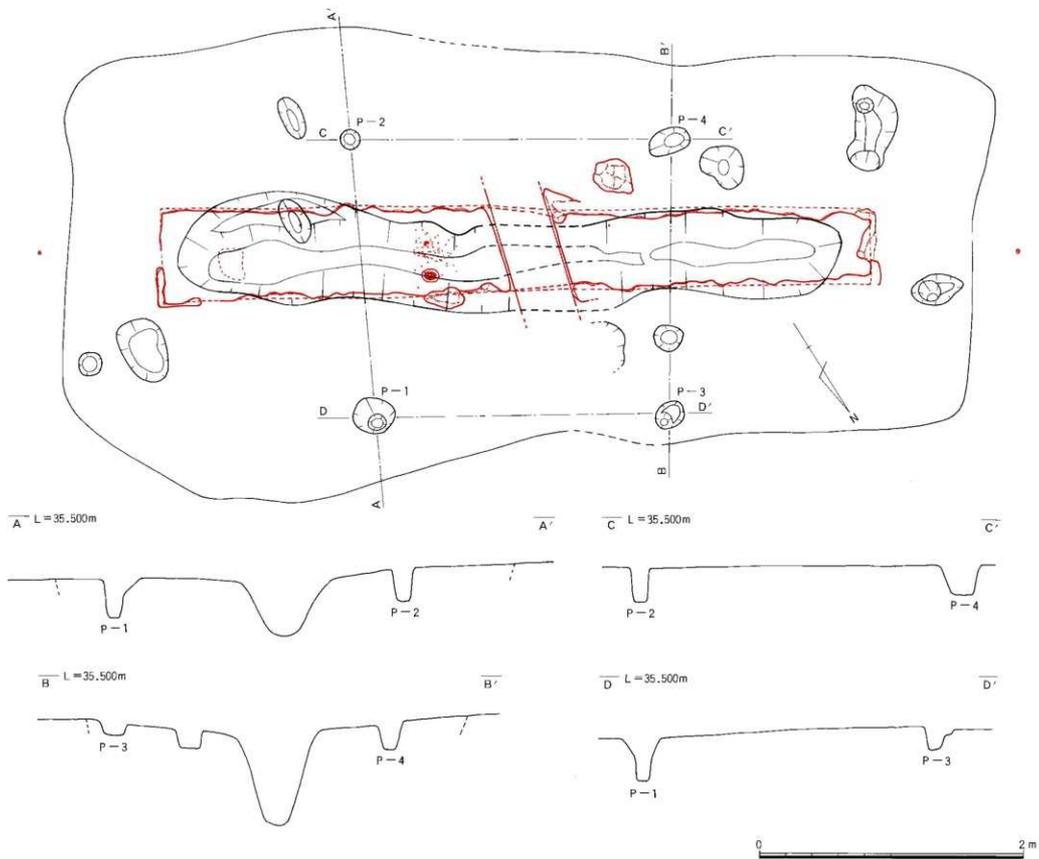
粘土槨内には木棺が腐朽し、崩壊した際に被覆粘土が落ち込んでいたが、被覆粘土と棺床粘土の間に茶褐色土が薄く堆積していたため、両粘土の識別は容易であった。これは木棺材が腐食した結果できた土層であろうと考えられる。この被覆粘土を除去すると、槨底は半円形というよりもやや楕円形に近く、木棺の胴部が楕円形（舟形）に近いものであったことが窺われた。

棺床粘土上（棺底）からの出土遺物は、東小口部から1.9mの地点でやや北側に寄せて銅鏡が1面、鏡背を上に向けた状態で検出された。鏡の周囲の覆土はやや黒ずんでおり、この覆土を取り除いた段階で鏡の出土を見たのであるが、上向きになっていた鏡背部には赤色顔料の付着が認められた。この鏡は直径11.4cmを測る小型の内行花文鏡であり、花卉に相当する文様が6弁表現されており、仿製（国産）の可能性が強いものと考えられる。また鏡面には布目が残り、布で包んであったものと考えられる。鏡面の下には木質が残っており、鏡を納めた容器か木棺底の木材であると考えられる。また、鏡の南側に勾玉1個と、それを取り囲む範囲でガラス小玉が67個検出された。このガラス小玉は棺床粘土上及び被覆粘土中からも検出されている。また鏡面の下からも検出されているため、棺内に副葬されていたことは確実であるが棺蓋上面、または被覆粘土上面にも供献されていた可能性がある。

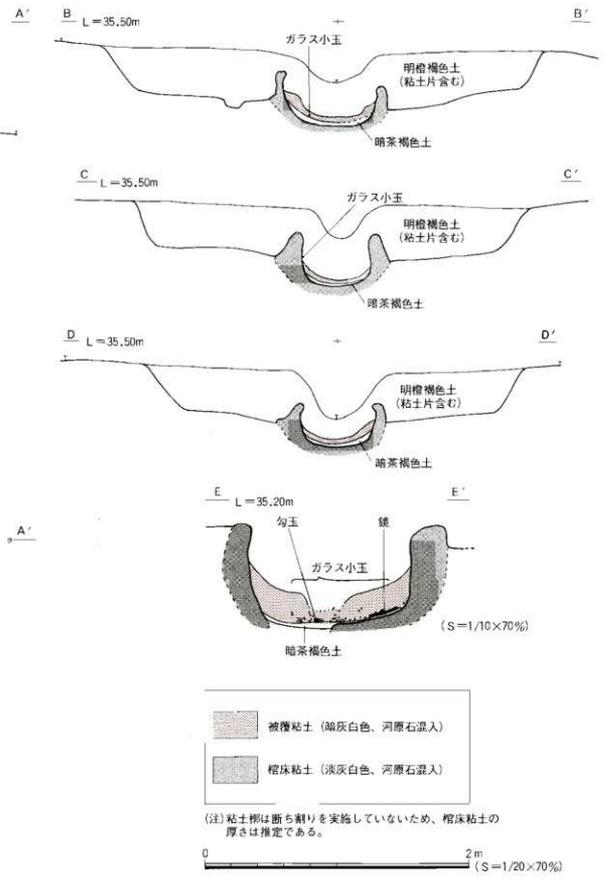
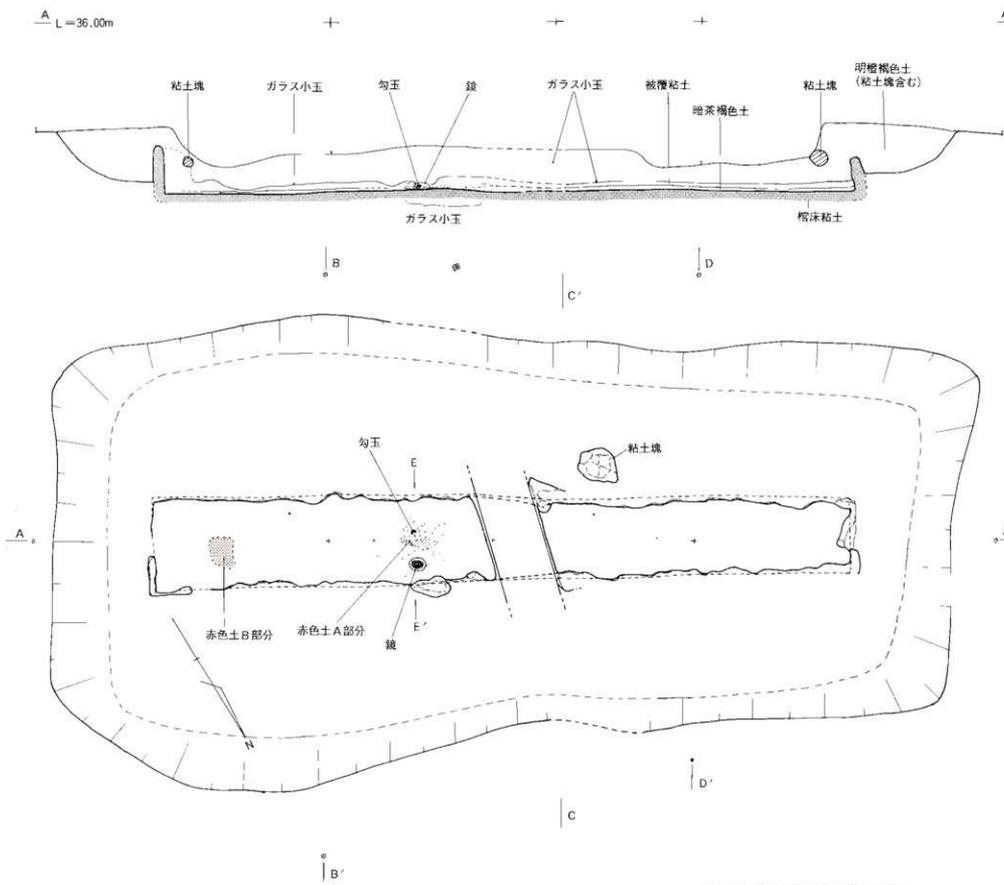
更に調査中においてガラス小玉と勾玉を中心とした23×10cmの範囲の床面および茶褐色土中に若干の赤色細粒が混在している状況が観察されたため、この粒と周囲の土をサンプリングした。（赤色土A部分、第15図）また、No1地点から東小口部へ向かって1.4m離れた地点では、床面上が25×20cmの範囲で赤茶色に変色している状況が観察され、赤色顔料が存在する可能性が考えられたのでこの部分の土をサンプリングした。（赤色土B部分、第15図）このサンプル土A、Bと鏡背部分に付着していた赤色顔料は、鑑定<sup>(註2)</sup>の結果、鏡背部顔料はベンガラ、サンプル土A中からは微量の水銀朱に混じて極微量に凝集したベンガラ小塊、サンプル土B中からは極微量のベンガラ（？）粒子が検出されたが、意識的に使用されたと判断される程の量ではなかった。

註1）「島根考古だより第28号、1990年」、「弥生墳丘墓における墓上の祭儀、島根考古学会誌第10号、1993年」の中で渡辺貞幸氏が述べておられる。

註2）福岡市埋蔵文化財センター本田光子氏、宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏の鑑定結果による。



第14図 第2主体部基壇検出面ピット検出状況 (S=1/20×70%)



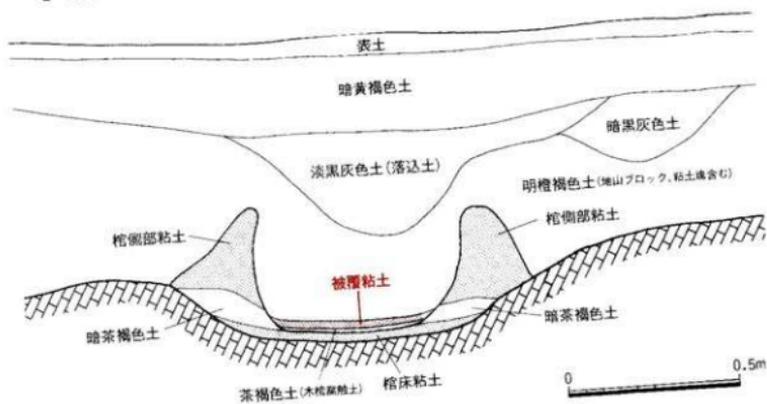
被覆粘土 (暗灰白色、河原石混入)  
 椀床粘土 (深灰白色、河原石混入)

(注) 粘土層は断ち割りを実施していないため、椀床粘土の厚さは推定である。

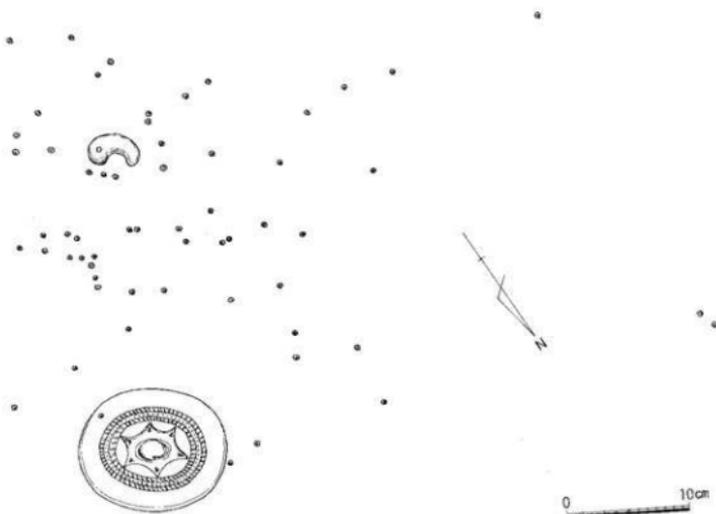
0 2m (S=1/20x70%)

第15図 第2主体部粘土層実測図

L = 35,800m



第16図 第2主体部土層断面図 (S=1/10×70%)



第17図 鏡, 玉類出土状況 (S=1/4)

## ● 出土遺物

第2主体部の出土遺物は、墓域直上の供献土器類は見られず、棺内出土の遺物のみである。

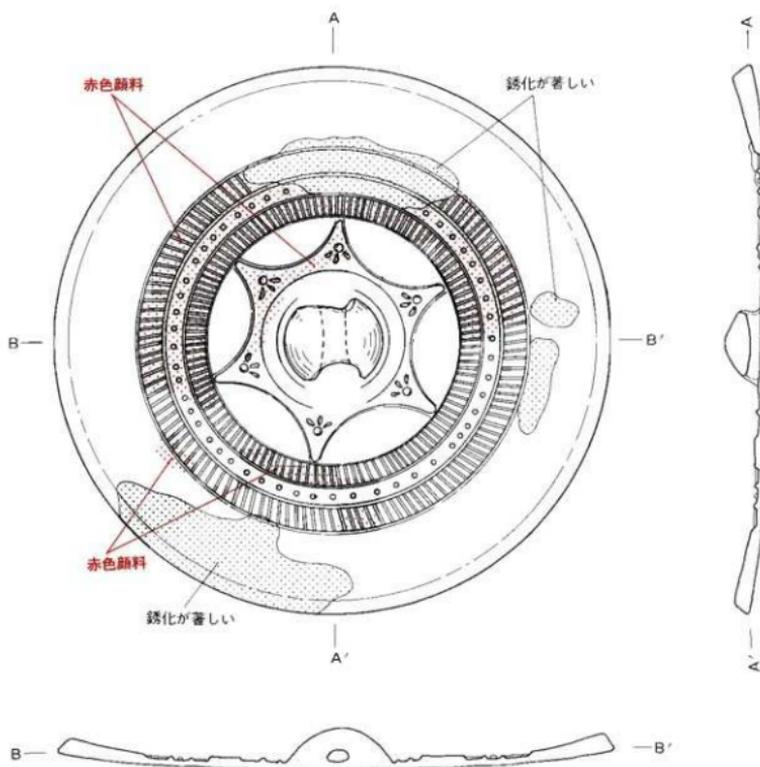
第18図は棺底から検出された仿製の内行花文鏡である。出土時には鏡背部を上向きにして棺底側部に置かれた状態で出土した。面径は11.4cmを測り、直径2.1cmの円鈕を中心として細い界線を2重に巡らせて鈕座とし、その外周に6弧文帯を置く。各花卉が接する部分には、弧文帯を垂幕文と見た場合に幕を縛り上げた紐に当たる文様がそれぞれ1個ずつ、合計6個配されている。6弧文帯の外周には1条の連珠文帯を2条の櫛歯文帯ではさむ形で配置して外区文様帯とし、さらに平縁部へと続く。全体に緻密な文様構成で精巧に鈎造されているが、鈕については一方がややいびつな形を呈しており、鈎上りが良くなかったものと思われる。また長年にわたって使用されたためか、鈕を巡る2条の界線は紐を通す孔の部分では摩滅して消滅している。

特筆すべき点としては、鏡背部の外区文様帯と内区6弧文帯の弧間に赤色顔料が付着している点で、鑑定の結果、ベンガラ(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)であることが分かった。また鏡面部には一部布目が付着しており、鏡面に接して遺存していた木質部にもベンガラが付着していたため、当初はベンガラで塗彩されてさらに布で包まれていたものと推定される。県内で鏡を布で包んで副葬した例としては、大原郡木次町の斐伊中山2号墳第4主体部出土の細線式鳥獸鏡<sup>(註1)</sup>の例、八束郡鹿島町の奥才14号墳第1主体部出土の内行花文鏡<sup>(註2)</sup>の例があり、奥才例では鏡背部に赤色顔料の付着も見られる。鏡以外では飯石郡三刀屋町の松本1号墳出土の小形剣形鉄器の例、安来市切川町の小谷土墳墓出土の刀子、やりがんな、安来市荒島町の造山3号墳出土の刀子の例など、前期古墳の副葬品に類例が見られるが、繊維物質自体が遺存する可能性が低いものであるために、他にも類例の数はあるものと考えられる。

鏡背部の文様構成として、内区に6弧文帯を置き、外区に櫛歯文帯、連珠文帯を配する例は仿製の内行花文鏡としては一般的であるが、外区の文様帯の組み合わせで1条の連珠文帯を2条の櫛歯文帯ではさむ形のものとしては類例が乏しく、管見の限りでは山口県宇部市の松崎古墳出土例<sup>(註4)</sup>がある程度である。この松崎古墳出土の内行花文鏡は、本墳出土例の文様構成とかなり近似しており、面径11.7cmで内区6弧文帯を持ち、その外周に本墳と同類の外区文様帯を持つ。さらに鏡面、鏡背部に赤色顔料が付着している点も注意されるところである。文様構成で若干の相違点としては、鈕の周囲に4重の界線が巡る点と、その外周に1条の連珠文帯が巡る点、各弧間接点部の文様が2個の珠文になっている点であるが、総じて共通点が多く見いだされる。

第19図No1～67は棺底から検出されたガラス小玉である。勾玉を中心とした範囲で合計67個が検出され、中には少し離れた位置から検出された個体もある。いずれもガラス製であり、淡～暗青緑色を呈する製品である。67個の内2個体はやや大型で直径6.5mm、厚さ5.0mm、孔径2.0～3.0mmを測る。その他の65個体はいずれも小型で、直径2.5～4.5mm、厚さ1.5～4.5mm、孔径1.0～2.5mmを測る。

第19図No68は棺底から検出された玉髓<sup>(註5)</sup>(碧玉)製の勾玉である。全長4.3cm、胴部最大幅1.7cm、胴部最大厚1.5mmを測る。孔は片側穿孔によるもので、貫通する側の孔淵を面取りする。孔径はそれぞれ40mmと1.5mmを測る。



第18図 第2主体部出土内行花文鏡 (S=1/1)

註1 「斐伊中山古墳群」木次町教育委員会, 1993年

註2 「奥才古墳群」鹿島町教育委員会, 1985年

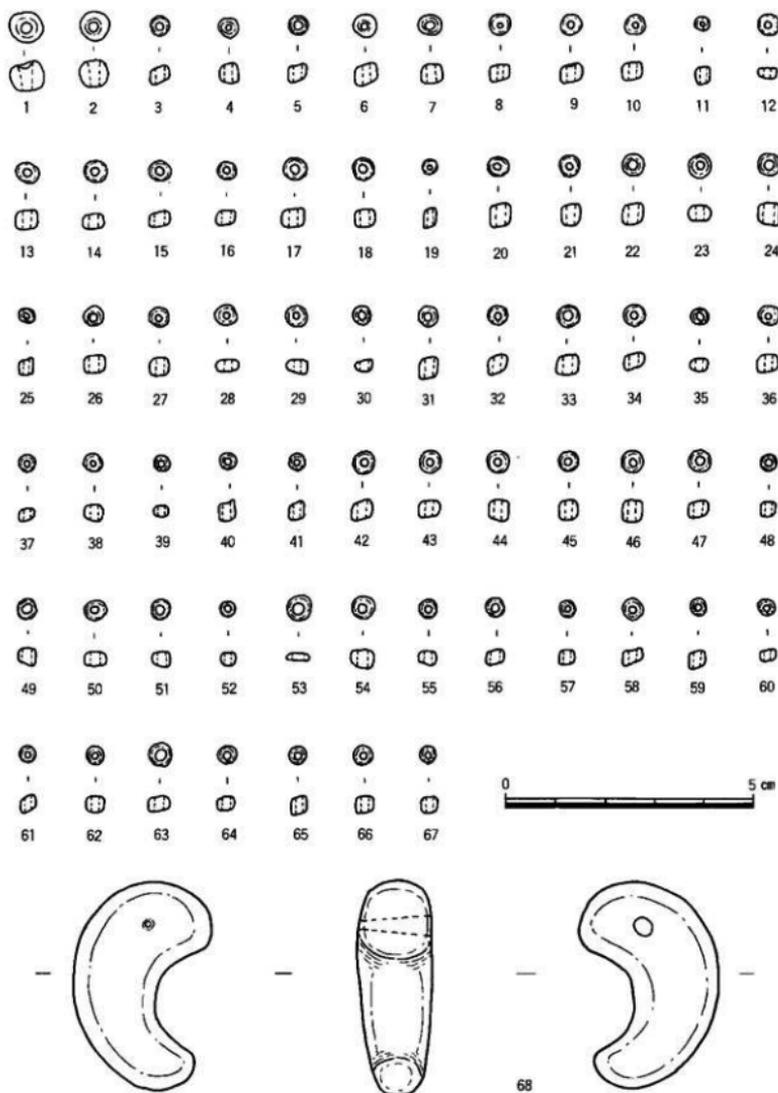
註3 布目順郎「鳥根県下における古墳時代前期の織物出土品について」『八雲立つ風土記の丘』(No63:5-10, 1983)の中で分析が試みられている。

註4 「松崎古墳」(宇部市文化財資料第1集)宇部市教育委員会, 1981年

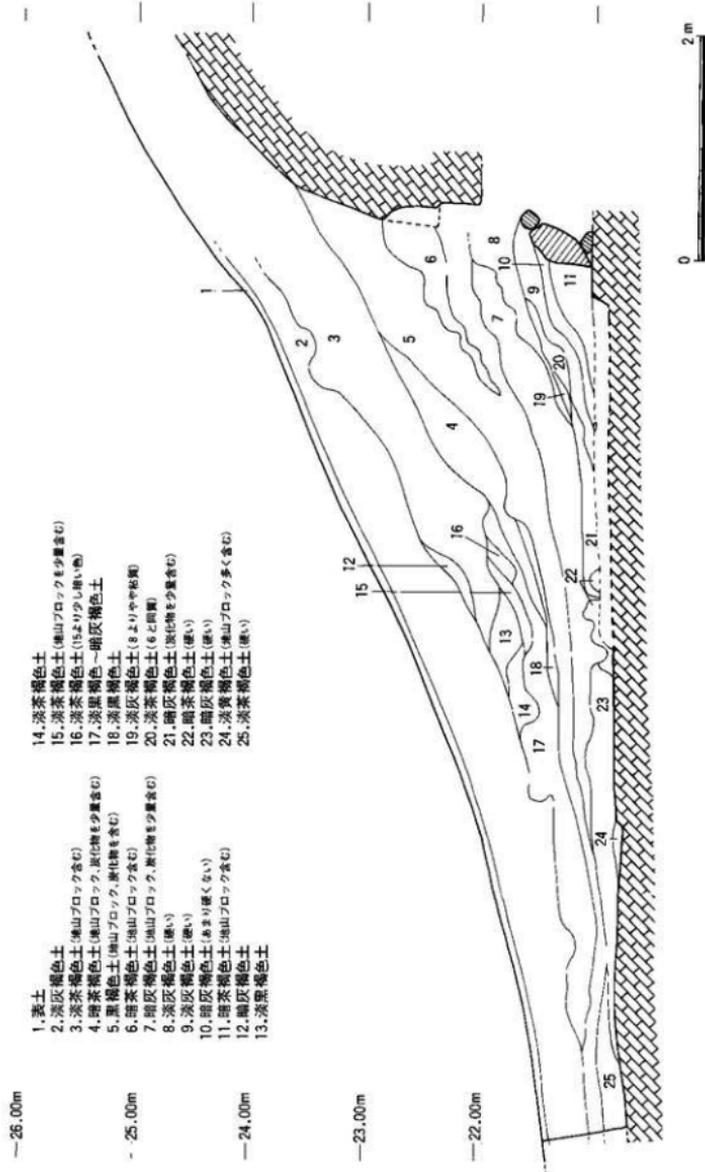
註5 沢田順弘氏の鑑定結果による(第4章1項)

第2表 ガラス小玉計測表

No.	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	色調	No.	直径(mm)	厚さ(mm)	孔径(mm)	色調
1	6.5	5.0	2.0~3.0	暗青緑色	35	3.5	2.5	1.5	青緑色
2	6.5	5.0	1.5~2.5	"	36	4.5	3.5	1.5	暗青緑色
3	4.0	3.0	2.0	淡青緑色	37	3.5	2.5	1.5	淡青緑色
4	4.0	4.0	1.5	青緑色	38	4.0	3.5	1.5	青緑色
5	4.0	3.5	2.0	淡青緑色	39	3.5	2.5	2.0	淡青緑色
6	4.5	3.5	1.5	"	40	3.5	3.5	2.0	"
7	4.0x4.5	4.0	2.0	"	41	3.5	3.5	1.5	"
8	4.5	3.5	1.0	青緑色	42	4.5	3.5	1.5	青緑色
9	4.5	3.5	1.5	"	43	4.5	3.5	1.5	"
10	4.0	3.5	1.5	"	44	4.5	4.0	1.5	"
11	3.0	3.5	1.5	淡青緑色	45	4.0	4.0	1.5	暗青緑色
12	4.5	2.5	1.5	"	46	4.5	4.5	1.5	"
13	4.5	4.0	2.0	青緑色	47	4.5	3.5	2.0	青緑色
14	4.5	3.0	2.5	淡青緑色	48	3.5	3.0	1.5	淡青緑色
15	4.5	3.0	2.5	"	49	4.0	4.0	2.5	"
16	4.0	3.0	1.5	"	50	4.0x2.5	3.0	2.0	暗青緑色
17	4.5	3.5	2.0	青緑色	51	4.0	3.0	2.0	淡青緑色
18	4.5	3.5	2.0	淡青緑色	52	3.0	2.5	1.5	"
19	3.0	3.5	1.0	"	53	5.0	1.5	2.5	"
20	4.5	4.5	1.5~2.0	青緑色	54	4.5	3.5	2.0	青緑色
21	4.5	4.5	1.5	"	55	4.0	3.0	1.5	淡青緑色
22	4.5	4.5	2.0	"	56	4.0	3.0	2.0	青緑色
23	4.5	3.0	1.5	淡青緑色	57	3.5	3.0	1.0	"
24	4.5	4.5	2.0	青緑色	58	4.5	2.0~3.0	1.5	"
25	3.5	3.5	1.5	淡青緑色	59	3.5	4.0	1.5	淡青緑色
26	4.0	3.5	2.0	青緑色	60	3.5	2.0	1.5	"
27	4.0	3.5	1.5	淡青緑色	61	3.5	3.0	1.5	"
28	4.5	2.5	1.5	青緑色	62	4.0	3.5	1.5	青緑色
29	4.5	1.5~3.0	1.5	淡青緑色	63	4.5	3.0	2.0	"
30	4.0	1.5~2.5	2.0	"	64	4.0	3.0	2.0	"
31	4.0	4.5	2.0	青緑色	65	3.5	3.5	1.5	"
32	4.5	3.5	1.5	"	66	4.0	3.0	1.5	"
33	4.5	4.0	2.0	淡青緑色	67	4.0	3.5	2.0	暗青緑色
34	4.5	3.0	1.5	暗青緑色					



第19图 第2主体部棺内出土玉類 (S=1/1)



- |                            |                         |
|----------------------------|-------------------------|
| 1. 黄土                      | 14. 淡茶褐色土               |
| 2. 淡灰褐色土                   | 15. 淡茶褐色土 (礫山ブロックも少量含む) |
| 3. 淡茶褐色土 (礫山ブロック含む)        | 16. 淡茶褐色土 (15より少し細かい)   |
| 4. 暗茶褐色土 (礫山ブロック、炭化層も少量含む) | 17. 淡茶褐色土 (暗灰褐色土)       |
| 5. 黄褐色土 (礫山ブロック、炭化層を含む)    | 18. 淡灰褐色土               |
| 6. 暗茶褐色土 (礫山ブロック含む)        | 19. 淡灰褐色土 (8よりやや粘質)     |
| 7. 暗灰褐色土 (礫山ブロック、炭化層も少量含む) | 20. 淡茶褐色土 (6と同質)        |
| 8. 淡灰褐色土 (硬い)              | 21. 暗灰褐色土 (炭化層も少量含む)    |
| 9. 淡灰褐色土 (硬い)              | 22. 暗茶褐色土 (硬い)          |
| 10. 暗灰褐色土 (あまり硬くない)        | 23. 暗灰褐色土 (硬い)          |
| 11. 暗茶褐色土 (礫山ブロック含む)       | 24. 淡黄褐色土 (礫山ブロック多く含む)  |
| 12. 暗灰褐色土                  | 25. 淡茶褐色土 (硬い)          |
| 13. 淡黄褐色土                  |                         |

第20図 C地点T-4 (北小原3号穴) 新証部堆積土層断面図

② 北小原3号穴について

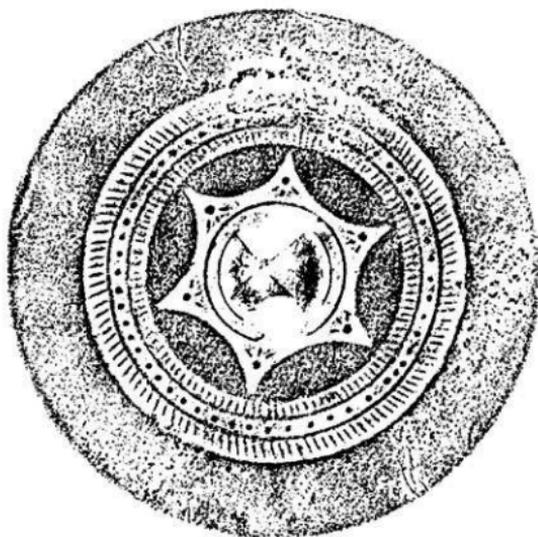
C地点丘陵東斜面に設定したT-4で検出した横穴墓である。玄室内部は未調査のため不明であるが、羨門開口部分からの観察では、整美に加工された玄室を持ち、床面には板石の屍床を三方に配しているように見られた。

③ 北小原4号穴について

C地点丘陵西斜面に設定したT-7で地山の加工（横穴前庭部分）が検出されたため、横穴墓の存在が推定される。調査が開口するに至っていないので内部構造は不明である。

(4) D地点の調査

C地点の西方に位置する標高25mの丘陵である。横穴墓の存在が推定され、T-13～T-16を設定して調査を実施する計画であったが未調査である。



第21図 内行花文鏡拓影

## 4. 自然科学分析

### (1) 釜代1号墳出土の勾玉について

島根大学理学部地質学教室  
助教授 沢田 順 弘

釜代1号墳第2主体部出土の勾玉は、肉眼鑑定と蛍光X線分析の結果、玉髓（碧玉）製と考えられる。この玉髓は細粒の角礫状で、変形を受けている。以下に蛍光X線分析装置（リガク社製 RIX2000）を用いた非破壊・半定量分析の結果を示す。

SiO <sub>2</sub>	89 wt%	K <sub>2</sub> O	3.8 wt%
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	4.2 wt%	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.04wt%
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	2.0 wt%	Cr	493ppm
MgO	0.51wt%	Rb	119ppm
CaO	0.16wt%	S	481ppm
Na <sub>2</sub> O	0.37wt%	Cl	710ppm

ケイ酸塩岩石の主成分元素SiO<sub>2</sub>、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、MgO、CaO、Na<sub>2</sub>O、K<sub>2</sub>O、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>の合計が100.08wt%（重量%）であることから、この岩石にはH<sub>2</sub>OまたはOHはほとんど含まれないものと考えられる（すなわちオパール成分は少ない）。この勾玉が淡緑色を呈するのは、Crを幾分（約500ppm）含むことによると考えられる。Ca/K比は0.0363であり、薬科・東村<sup>(註1)</sup>によって報告されている碧玉の同比と比較すると、花仙山産のものが0.067±0.075、玉谷産のものが0.042±0.047、猿八産のものが0.011±0.032で、これらの標準偏差（1σ）の範囲内に入るが、二俣原産のもの（0.268±0.077）、細入産のもの（1.021±0.457）の標準偏差（1σ）の範囲内には入らない。

註1）薬科哲男，東村武信「布田遺跡出土の碧玉製管玉の蛍光X線分析法および電子スピニング共鳴法による原材料地分析」（一般国道9号線松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ，布田遺跡）島根県教育委員会，1991年

※花仙山産；島根県八束郡玉湯町，玉谷産；兵庫県豊岡市，猿八産；新潟県佐渡郡畑野町，二俣原産；石川県金沢市二俣町，細入産；富山県婦負郡細入村

（付録）蛍光X線による定性分析結果（第22，23図）



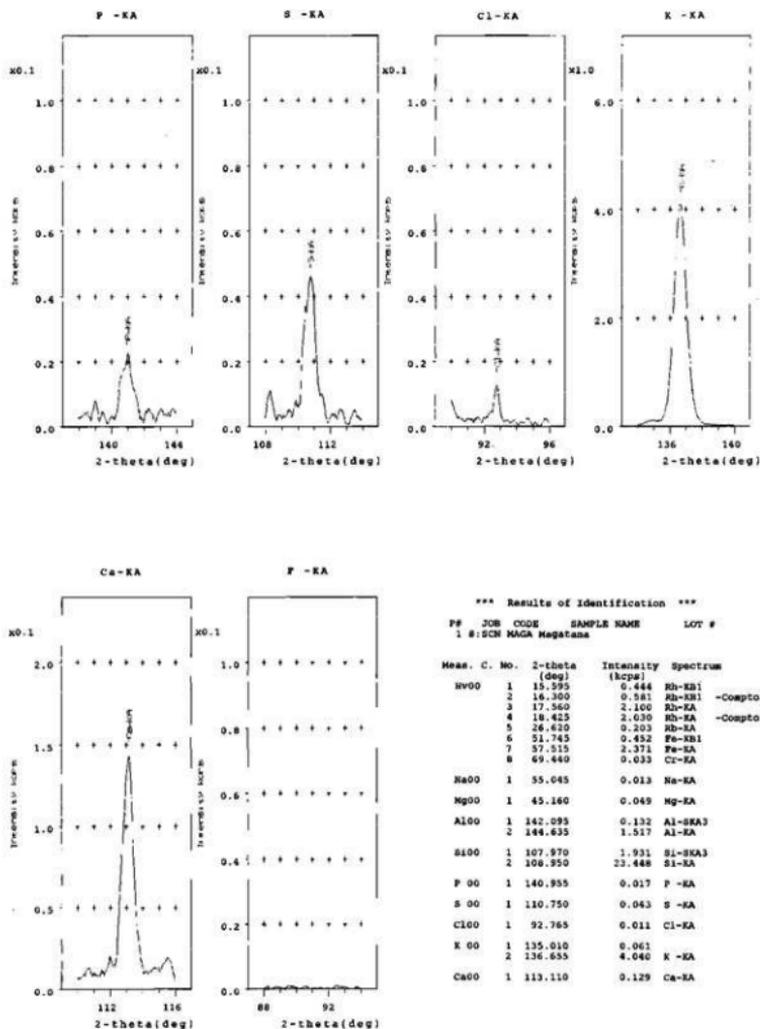
\*\*\* Qualitative Analysis \*\*\*

94-03-01 15:37

Sample: NAGA Hagatama

FILE:

Position: 1

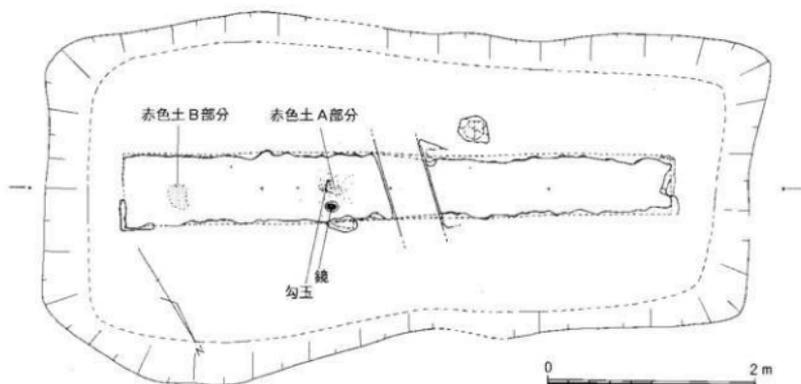


第23図 (付録-2) 蛍光X線定性分析データ

## (2) 釜代1号墳出土の赤色顔料について

福岡県埋蔵文化財センター 本田光子  
宮内庁正倉院事務所 成瀬正和

釜代1号墳第2主体部出土の赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察、蛍光X線分析、X線回折を行った。出土例に関する今までの知見によれば、墳墓出土の赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄を主成分とするベンガラと、硫化第2水銀（赤）を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、今のところ出土例はない。これら3種類の赤色顔料を考えて分析を行った。試料の一覧・分析結果と、それにより推定される赤色顔料を第3表に示した。



第24図 釜代1号墳第2主体部赤色土検出状況

### 試料

赤色物の出土状況は第24図のとおりであり、床面付近AとBの部分に認められ、また、鏡にも背とその下に位置していた木片に認められている。提供を受けた試料はNo1がA部分の「赤味をおびた土」、No2がA部分の中から最も赤色の濃い部分を調査者が抽出したもの、No4がB部分の「やや赤味をおびた土」である。鏡（No5～8）と木質（No9）については、試料採取を行わずそのままの状態での分析を行った。

A部分を実体顕微鏡下で観察すると、明るくしかも濃い赤色をした朱のように見える赤色物の小塊および土状の（骨粉化した）骨の組織の中に面状、層状に付着したり入り込んだりしたのが見い出された。この朱のような赤色物を分離抽出しNo3とした。No1～3については土砂、骨粉等夾雑物を除去し、針先に付く程度を検鏡用に、残りをX線分析に供した。

第3表 赤色顔料分析結果表

No.	試料	蛍光X線分析		X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類
		鉄	水銀	赤鉄鉱	炭砂		
1	床面付近 A	+	+	-	?	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
2	床面付近 A	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ
3	床面付近 A	+	+	-	+	朱	朱
4	床面付近 B	+	-	-	-	ベンガラ?	ベンガラ?
5	鏡背(赤色部)	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ
6	鏡背(赤色部)	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ
7	鏡面	+	-	—	—		
8	鏡面	+	-	—	—		
9	木質(赤色部)	+	-	+	-	ベンガラ	ベンガラ

+: 検出 - : 未検出 — : 未測定

#### 顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・落射光40~400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。

No1には、赤色顔料として朱の特徴(やや角張った形状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等)を持つ粒子が全体に拡散して認められ、そのほかに顕著なベンガラの特徴を持つ赤色顔料粒子が僅かではあるが一部にまとまって認められた。No2・5・6にはベンガラのみが認められた。No3は朱のみである。No4には極めて微量のベンガラかと思われる粒子が認められた。大半が透明度の高い非常に細かい(5 $\mu$ m以下)粒子から成り、いわゆる長大なパイプ状粒子は含まない。朱の粒度は、ほぼ0.5~30 $\mu$ mの範囲であるが、30 $\mu$ m以上の粒子も僅かに含まれる。

#### 蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。理学電機工業練製蛍光X線分析装置を用い、X線管球;クロム対陰極,印加電圧;40kV,印加電流;20mA,分光結晶;フッ化リチウム,検出器;シンチレーション計数管,ゴニオメーター走査範囲(2 $\theta$ );10~65°,走査速度;2 $\theta$ 8°/分,時定数;0.5秒の条件で測定を行った。

赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀,ベンガラであれば鉄であるので,二種の元素の有無のみ表中に記した。No1,3は赤色顔料の主成分元素としては鉄と水銀が, No2,4~6,9には鉄のみが検出された。この他主として混入の土砂部分および鏡の金属部分に由来する元素は省略した。ただし,鉄は出土試料には必ず含まれるので,赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。No1,3は,水銀に比べて鉄のX線強度は小さいので,赤色の由来となる主成分元素は水銀と推定される。全試料とも鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

## X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的として実施した。理学電機機軸文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極，フィルター；バナジウム，印加電圧；25kV，印加電流；10mA，検出器；シンチレーション計数管，発散および受光側スリット； $0.34^\circ$ ，照射野制限マスク（通路幅；4mm，ゴニオメーター走査範囲（ $2\theta$ ）； $30\sim 66^\circ$ ，走査速度 $2\theta 4^\circ/\text{分}$ ，時定数；2秒の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分鉱物としては，朱であれば辰砂，ベンガラであれば赤鉄鉱である。第3表には2種の鉱物の有無のみについて記した。No3には辰砂(赤)が，No2, 5, 6, 9には赤鉄鉱が同定された。

## まとめ

検鏡，蛍光X線分析，X線回折の結果から推定された赤色顔料の種類と状況は下記の通りである。

1. 釜代1号墳第2主体部の床面A部分の赤色物は赤色顔料「朱」である。
2. 鏡および木質に付着している赤色物は赤色顔料「ベンガラ」である。
3. 床面B部分に認められた赤色物は赤色顔料「ベンガラ」であるかどうか確定できない。
4. 床面A部分からはベンガラも検出されているが，微量であることおよびA部分全体に拡散していないことにより，鏡部分からの移動等二次的な要素である可能性が高いと思われる。

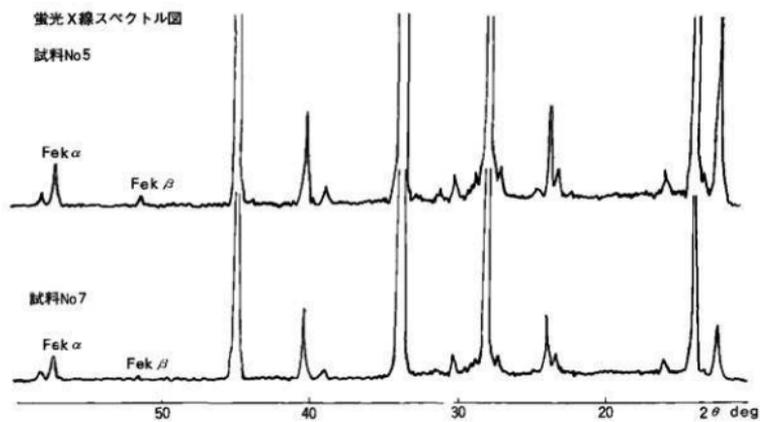
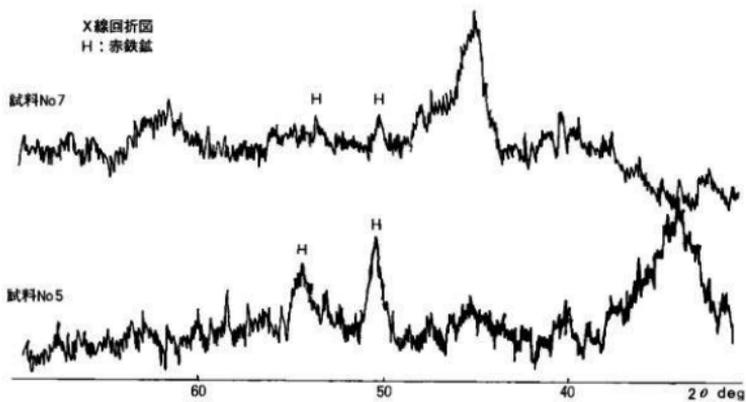
以上の事実から釜代1号墳第2主体部での赤色顔料の使われ方については次のように考えることができよう。A部分は遺骸の頭胸部分に当たるものと考えられ，葬送儀礼の中で（何時の時点かは不明ではあるが）被葬者に直接「朱」が施されたものと判断できる。鏡背にはこれも何時の時点かは不明であるが「ベンガラ」が施されている。埋葬施設そのものには赤色顔料は認められなかった点に注意したい。

墳墓での赤色顔料の使われ方には幾通りかの「型」があるが，大きく分けると埋葬施設と遺骸の両方から赤色顔料が検出される場合と，遺骸のみから検出される場合である。副葬遺物に赤色顔料が認められる場合は，埋葬施設あるいは遺骸からの二次的付着と判断されることも多い。

本例では埋葬施設そのものへの赤色顔料塗布はなく，棺床面あるいは遺骸全体への散布も認められない。遺骸の頭胸部に少量の朱が施され，副葬の鏡にはベンガラが施されていた。遺骸と遺物に異なる赤色顔料を用いているので，鏡のベンガラは二次的な付着ではなく，既に施されていたものである。副葬遺物に赤色顔料が認められる場合でも通常は遺骸の赤色顔料と同じ朱であることが多いため，施された経途は特に詮索されない。鏡に赤色顔料が付着していることは弥生時代後期から多くの例が知られているが，本例はそうした行為と赤色顔料の意味について考える上で非常に貴重な資料である。

調査時に，もし最も赤色の濃い部分（ベンガラ）だけを採取して，その周囲の淡い赤色部分（朱）を採取していなかったら，今回の貴重な結果を得ることはできず，遺骸も遺物もベンガラだけが使われていたということになりました。現場での調査担当者の見識と判断に敬意を表し，赤色顔料調査の機会を頂きました徳松江市教育文化振興事業団中尾秀信氏，飯塚康行氏に感謝致します。

註1）銅製品表面の赤色物については「赤色顔料」であるか「鏽」であるかを必ず調査しなければならない。



第25図 X線分析チャート



1. 鏡背のX線分析測定位置



2. 鏡面のX線分析測定位置



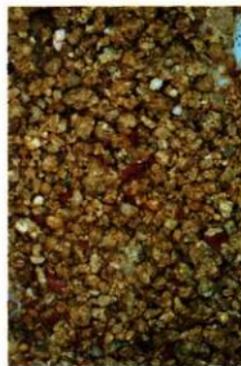
3. 赤色顔料の付着状態



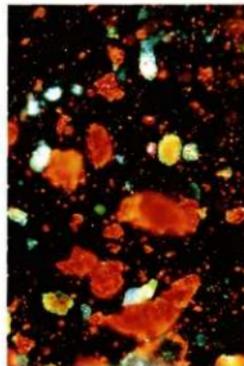
4. 赤色顔料の付着状況



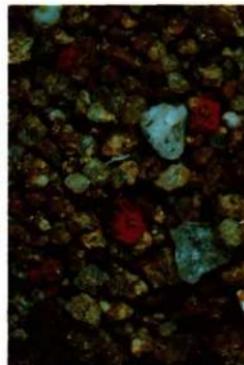
5. 木質のX線分析測定位置



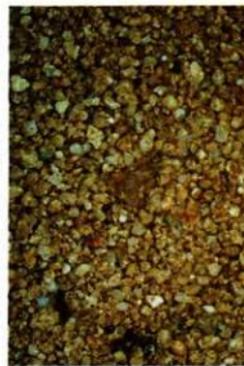
2. 床面出土の赤色顔料A部分試料No.2(約12倍)



7. 試料No.3(約120倍)



8. 試料No.1(約35倍)



9. 床面出土の赤色顔料A部分試料No.1(約12倍)

鏡・木質付着の赤色顔料と床面出土の赤色顔料

## 5. 考 察

### (1) 赤色顔料について ——島根県内の墳墓における出土状況について——

古代の日本において使われた赤色顔料には、水銀朱 (HgS)、ベンガラ (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、鉛丹の3種類があるが、墳墓に赤色顔料が使用されるようになるのは縄文時代晩期末以降で、北部九州地方の甕棺墓に多く見られる<sup>(註1)</sup>。この場合使用される顔料は水銀朱が主流を占めており、ほとんどが遺骸に施されたものと推定されている。そして甕棺墓は弥生時代中期にピークを迎え、弥生時代後期終末に至って衰退に向かい、この頃から赤色顔料の主流は水銀朱からベンガラに移り、箱式石棺の棺内全面にベンガラを塗布し、床面にもベンガラが多量に散布、または敷かれている。そして水銀朱が使われる場合はごく微量が頭胸部周辺に使われているのが一般的な状況である。

島根県内において赤色顔料が出土した遺跡(墳墓に限る)を管見の限り集成したものが第5表であるが、これを見ると県内で赤色顔料が見られるようになるのは弥生時代後期終末の首長墓と見られる墳墓の主体部からであり、本田氏の論考<sup>(註2)</sup>の中で、この時期に九州以外の地域でも朱が使用されるようになるという説に合致している。

県内出土の赤色顔料については幾つか分析された例があるが、これによれば、弥生時代後期終末～古墳時代前半期までは水銀朱が多く、それ以降ベンガラが一般的に使われる状況が窺われ、古墳時代後期以降になると顔料そのものが墳墓ではあまり使用されなくなる傾向が見られる。

次に赤色顔料の使用法については、平野氏<sup>(註3)</sup>が県内の出土例をまとめておられるが、これを基に私見を加えて更に細かく分類すると、

- 1類) 主体部床面のほぼ全面に塗布する例
- 2類) 主体部床面に部分的に厚く堆積して検出された例
- 3類) 顔料が塊状となって検出された例
- 4類) 主体部床面に部分的に少量検出された例
- 5類) 顔料が土器内に残存して検出された例
- 6類) 顔料が人骨に付着して検出された例
- 7類) 棺の内側、石室壁面等に塗布された例
- 8類) その他特殊な例

がある。これを分類別に並べたものが第4表であるが、この結果注意されることは、第1類～第4類は水銀朱の場合が多く、弥生時代後期終末～古墳時代前半期の四隅突出型方形墳や前期大型古墳などの首長墓的な性格の強いものが集中し、第5類～第7類はベンガラの場合が多く、古墳時代後半期の小規模古墳や特に横穴墓に類例が集中する傾向が見られる。第8類は類例が少なく、特殊な場合であると考えられるので考察は差し控えるが、第1類～第4類と第5類～第7類の間には画期があるようであり、時代と共に使用する顔料の種類とその使用方法も変化してゆく状況が見られる。

すなわち、弥生時代後期末～古墳時代前半期にかけては、被葬者の死に際して棺内(特に棺底)を

鮮やかな赤で彩る目的（第1類、第2類）で使用されたことが考えられる。また第3類、第4類はごく微量であったり、多量でも部分的であるためにあまり視覚的な効果は期待できないものと考えられる。出土位置を見ると、棺内の中央部分または少し小口部に寄った部分に見られる場合が多い。ちょうど被葬者の頭位部分であったり、鏡や玉類、鉄器等、副葬品の置かれた重要な部位であることに注意される。すなわちこれは被葬者そのもの（特に頭胸部分）に塗布したり、塊状に副葬する意味で置かれたことが指摘されている<sup>(註4)</sup>。ここで注意しなければならないのは、第1類では全面に赤色顔料が塗布されているために識別しかねるが、床面への塗布と同時に被葬者への塗布もあった可能性も考える必要があるという点である。

また第1類～第4類はいずれも水銀朱を使う場合が多いが、この時期に九州地方では水銀朱がしだいに使われなくなり、ベンガラに切り替わるのと対照的である。このことは、県内に水銀朱を墳墓で使う風習の導入が遅れたことを示唆するものかもしれないが、鳥根県内でも、水銀朱が弥生時代後期末に墳墓に導入された後は、古墳時代前期に至るまでは首長クラスの墳墓で使用されたのち、しだいに使用される量は減少し、時代とともに省力化、簡略化して、部分的かつ効果的に使用する傾向が窺われる。

古墳時代後半になるとかなりベンガラが普及してきたように思われ、この頃から奈良時代にかけての集落跡、祭祀関連遺構、横穴墓、官衙跡、寺院跡から出土した土師器の坏類、皿類、土馬等にベンガラで塗彩されたものが多く見られるようになり<sup>(註5)</sup>、祭祀に関連して使

第4表 赤色顔料出土状況分類表

1類(主体部床面のほぼ全面に塗布する例)

No.	遺跡名	種別	時期
2	西谷3号墓	水銀朱	埴原
6	安養寺1号墓第1主体	未分析	小谷期

2類(主体部床面に部分的に厚く堆積して検出された例)

No.	遺跡名	種別	時期
5	宮山4号墓	ベンガラ	小谷期
7	神原神社古墳粘土床	水銀朱	小谷期
8	松本1号墳第1主体	水銀朱	小谷期
13	小嵐谷3号墳第1主体	ベンガラ	小谷期

3類(顔料が塊状となって検出された例)

No.	遺跡名	種別	時期
6	安養寺1号墓第2主体	未分析	小谷期
16	中山2号墳	水銀朱	山本II期

4類(主体部床面に部分的に少量検出された例)

No.	遺跡名	種別	時期
8	松本1号墳第2主体	水銀朱	小谷期
9	釜代1号墳第2主体	水銀朱	小谷期
10	聖伊中山2号墳第4主体	水銀朱	小谷期
11	聖伊中山14号墳	水銀朱	小谷期
17	道仙3号墳	未分析	不明
18	道仙5号墳	未分析	不明
29	弥生原4号穴	ベンガラ	山本III期

5類(顔料が土器内に残存して検出された例)

No.	遺跡名	種別	時期
7	神原神社古墳埋納壇	水銀朱?	小谷期
24	韓田所在古墳	未分析	不明
26	二子塚古墳	ベンガラ	山本II期
27	鹿山B-1号墳穴	ベンガラ	山本IV期
28	高津久横穴	ベンガラ	不明
29	弥生原4号穴	ベンガラ	山本III期

6類(顔料が人骨に付着して検出された例)

No.	遺跡名	種別	時期
19	鹿壳塚古墳	未分析	古墳時代中期
25	川子谷B-1号墳	水銀朱	不明
30	黒鳥2号穴	ベンガラ	山本IV期

7類(棺の内側、石室壁面に塗布された例)

No.	遺跡名	種別	時期
1	順庵原1号墳	未分析	埴原
7	神原神社古墳石室壁面	水銀朱?	小谷期
19	鹿壳塚古墳	未分析	古墳時代中期
20	仲仙寺1号墳	未分析	古墳時代中期
21	仏山古墳	未分析	古墳時代中期
22	谷山古墳	未分析	不明
23	西万田嶋神社境内古墳	未分析	不明
31	矢田II群1号墳穴	未分析	古墳時代中期
32	東光台横穴	未分析	古墳時代中期

8類(その他特殊な例)

No.	遺跡名	種別	時期
15	奥才34号墳	ベンガラ	不明

用されたものと考えられている。ベンガラは普及により赤色顔料は一般の人々にはより身近な彩色用として利用されたようである。一方水銀朱はこの頃から墳墓出土例はほとんど見られなくなり、古墳の主体部において赤色顔料を使用する場合にはベンガラを一般的に使う傾向が見られる。

すなわち、第5類の場合は特に横穴墓から検出された坏類の内面に顔料の付着が見られる場合で、顔料そのものを副葬したり、何らかの祭儀に使用した残りを納めたものと考えられるが、この場合、現時点までの調査例ではベンガラ4例、水銀朱1例、不明1例となっており、ベンガラが圧倒的に多い。水銀朱と思われる例は神原神社古墳(N<sub>0</sub>7)埋納墳出土の壺内に納められたものであるが、これは古墳時代前期の事例であるので除外して考えると、古墳時代後半期では顔料の副葬に際してはベンガラを一般的に使用する傾向が認められる。

第6類は顔料が人骨に付着して検出された例である。人骨自体の遺存例が少ないために事例は少ないが、分析の結果判明しているのは水銀朱1例、ベンガラ1例である。また毘売塚古墳(N<sub>0</sub>19)は分析されていないが調査時の観察の中で、<sup>(註5)</sup>棺内に丹、棺内に朱、というように書き分けられており、棺内にはベンガラ、人骨にはより鮮やかな水銀朱が塗られていた可能性も考えられる。また、第6類の使用法で注意されることとしては、先葬者に対する塗布であるという点である。川子谷B-1号墳の場合は女性の頭骨顔面部分及び頭骨推定原位置に水銀朱が認められ、黒鳥2号横穴墓の場合は1号人骨(性別不明)の頭蓋冠、上顎骨前面、上顎歯、下顎歯の外側面に点状～斑状に付着していた。この2例はいずれも初葬の被葬者に対する塗布で、しかも白骨化した後に塗布されていることが特徴的で、<sup>(註6)</sup>後葬者埋葬時における先葬者に対する儀式であるとの指摘がされている。また、毘売塚古墳の場合は、舟形石棺の中に1体の人骨が残存しており、頭部に顔料が付着していた事例である。この場合には初めから追葬は予定されていなかったが、埋葬時に被葬者の顔面に塗布されたことが考えられ、先の2例と比べて塗布する位置は同じであるものの、使用方法には相違が見られ、先に第4類の事例で述べた被葬者の頭部部分に顔料の残存が見られるものと同様に捉えられるのではないだろうか。

第7類は棺の内側や石室の壁面に塗布された例である。弥生時代後期の順庵原1号墳や古墳時代前期の神原神社古墳にも例があるが、特に古墳時代後半期に安来市内の古墳や横穴墓の石棺に顕著に見られ、地域的な風習としても捉えられる可能性がある。分析された例はない(神原神社古墳の場合は粘土床検出資料のみ分析されているため不明であるが、同じ顔料を使ったものとなれば水銀朱となる)が、顔料を多量に必要とするため、入手しやすいベンガラが使われた可能性が強いものと考えられる。

以上分類したものを整理すると、大まかには装飾的な使用法(第1,2,7類)、副葬品的な使用法(第3,5類)、祭儀的な使用法(第4,6類)の3区分に大別される。これに時代的な流れを加味すると、弥生時代後期～古墳時代前半期に主体部棺底を水銀朱で鮮やかに彩る第1類、若干省略化の見られる第2類は古墳時代後半期に石棺の内面を彩る第7類へと継承され、塊状に顔料を副葬した第3類は横穴墓に見られるような坏類に納めて副葬する第5類へ、被葬者の頭～胸部に塗布された第4類は第6類へとつながる3つの大きな流れがあり、また弥生時代後期～古墳時代前半期には水銀朱が多用され、後半期以降は顔料そのものが墳墓において使用されることが少なくなる中でベンガラに主流が移り変わる傾向が見られる。

本墳の場合は第4類に属するが、鏡に附着していたベンガラと、床面からは微量の水銀朱に混じって極微量のベンガラの小塊が検出されている。<sup>(註8)</sup>両者が同時に検出された例は他に第8類の奥才34号墳の例がある。本例の場合は土壌に納めた土師器甕内に礫が詰められ、その上層の礫からベンガラと微量の水銀朱が検出されている。これは埋葬主体とは考え難く、どのような施設で、どのように使用されたかは不明であるが、二種類の顔料を使っている点で貴重な事例である。また、昆壳塚古墳の事例が先に述べたように被葬者の頭位に水銀朱、石棺内面にベンガラが使われていたのならば、祭儀の行為に水銀朱、装飾の行為にベンガラ、というような使い分けの意識が想定される。本墳の場合には、鏡背部はベンガラで塗彩され（鏡背部をどの時点で塗彩したかは不明）、更に被葬者の頭位が斐伊中山2号墳の例のように鏡付近にあったとするならば、被葬者の頭胸部には水銀朱が塗布されたと考えられ、両者の顔料が棺底に混在して遺存したものと推定され、祭儀の行為に水銀朱、装飾の行為にベンガラというように、ここでも顔料の使い分けが想定されるのではないだろうか。

一方、赤色顔料を土器に塗彩する例は、県下では縄文時代後期から見られ（第6表）、<sup>(註9)</sup>五明田遺跡から出土した浅鉢や深鉢の外周縄文帯に塗彩された例をはじめ、弥生時代では布田遺跡<sup>(註10)</sup>から出土した中期の壺形土器の口縁部または頸部外面文様帯に塗彩する例や、西谷3号墓第1主体部直上供献土器<sup>(註11)</sup>に塗彩されたものが見られるように墳墓の供献土器に塗布される例、そして古墳時代後期～奈良時代にかけての埴、皿類に顕著に見られる赤色塗彩例など、墳墓の主体部中に顔料が導入される以前から既に使用が始まり、以後継続する状況が窺われる。これらの中で分析された例をあげると、布田例はベンガラ、西谷例では水銀朱が検出され、古墳時代後期～奈良時代にかけての埴、皿、土馬からはいずれもベンガラが検出されている。また土器以外の器物については、タテテウ遺跡から出土した弥生時代中期の櫛には赤漆の塗彩が見られ、分析の結果、水銀朱が検出されている。数少ない分析例から言及できることは少ないが、現時点で言えることは、遅くとも弥生時代中期には水銀朱とベンガラの両者は存在し、使用されたが、古墳時代後半期に至ってはほぼベンガラ一辺倒の使用となり、墳墓における場合と同じ状況を示す。そこには両者を祭儀用と装飾用に使い分ける意識が存在していて、やがて時期が下ると共にその意識が薄れて行くことも推定されるが、現時点では確証に乏しく、また水銀朱とベンガラの物的な側面と入手の易難も考え併せる必要があるものと思われるので、今後更に検討を要する課題としておきたい。

註1) 本田光子・成瀬正和「亀山古墳出土の赤色顔料について」(志免町埋蔵文化財調査報告書第5集)1993年

註2) 註1に同じ

註3) 平野芳英「鳥根の考古学と自然科学—1—」(鳥根県八雲立つ風土記の丘研究紀要Ⅱ)1990年

註4) 斐伊中山2号墳第4主体部床面の土壌分析により、リン分検出範囲と、鏡、顔料遺存位置との照合により、鏡と顔料の位置に被葬者の頭～胸部があったものと推定されている。杉原清一「床土の化学分析による遺体位置の特定」(八雲立つ風土記の丘報№117, 1993年)及び「斐伊中山古墳群」(木次町教育委員会, 1993年)

註5) 山本清「山陰古墳文化の研究, 第2章山陰の石棺について, 94頁」1971年

註6) 上田健夫「付録Ⅱ; 鳥根県加茂町川子谷B-1号墳出土の朱色顔料」(神原地区遺跡分布調査報告1988年)ほか註3にも同じ

- 註7) 先に述べたように第1,2類中には、被葬者へ塗布した場合もあり得ることで、この場合には装飾的な側面と、祭儀的な側面を併せ持つことになる。
- 註8) 本田光子・成瀬正和両氏の鑑定結果による。
- 註9) 柳浦俊一氏の教示による。「五明田遺跡」(飯原町教育委員会)1991年
- 註10) 永嶋正春「布田遺跡出土漆塗土器、赤彩土器の塗装技術について」(一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ、布田遺跡)(島根県教育委員会)1991年
- 註11) 渡辺貞幸・田中義昭「山陰地方における弥生墳丘墓の研究」(島根大学法文学部考古学研究室)1992年
- 註12) 永嶋正春「タテチヨウ遺跡出土の赤色漆塗土器に見られる漆技術について」(朝陽川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ)1990年

第5表 鳥根県内赤色顔料出土遺跡一覧表

No.	名称・所在地	遺跡の概要及び所在地	種別・分析法	その他出土遺物
1	順庵原1号墳 (邑智郡瑞穂町)	四隅突出型墳丘墓(10.8×8.3m) 墳頂部に3基の主体部 (第1基) 箱式石棺内側に多量の丹度 (第2基) 箱式石棺内側に少量の丹度	未分析	(第1主体部内) ガラス小玉14個 (第2主体部内) ガラス小玉49個 ガラス管管3個
2	西谷3号墓 (出雲市大津町)	四隅突出型墳丘墓(50×40m) 墳頂部に8基の主体部 (第1基) 箱式木棺底全面、厚さ3~4cm 落込土底の円礫に付着 主体部直上供献土器中に塗彩されたものあり (第3基) 箱式木棺底全面、厚さ最大3cm	水銀朱 X線分析法と 蛍光X線分析 (1988)	(第1主体部内) 大形管玉22(ガラス) 小形管玉30(緑色顔料系) 玉 4(ガラス) 小玉 170(ガラス) (第1主体部直上供献土器) 管24、管輪3、管台6、管環19、把手 付短管13、管形管台24、丸管9 (第3主体部) 遺物なし
3	仲仙寺9号墓 (安来市西赤江町)	四隅突出型墳丘墓(27×22.5m) 墳頂部に3基の主体部 (中2基) 箱式木棺底に赤色顔料が残存 (範囲不明)	未分析	(中央主体内) 碧玉管管玉11 (主体部直上) 管、管台、管環
4	仲仙寺10号墓 (安来市西赤江町)	四隅突出型墳丘墓(推定約25m) 墳頂部に11基の主体部 その内木棺底に赤色顔料の残るものが あった	未分析	中央大形管玉2基に碧玉管管玉9+19個 主体部直上に管、管台、管環、管輪等
5	宮山4号墓 (安来市西赤江町)	四隅突出型墳丘墓(28.8×24.6m) 墳頂部に主体部1基 箱式木棺床面に多量に堆積(詳細不明)	ペンガラ 蛍光分光分析 (1983)	(管内) 太刀
6	安養寺1号墳 (安来市西赤江町)	四隅突出型墳丘墓(20×16m) 墳頂部に4基の主体部 (第1基) 箱式木棺床面全面に残存 (第2基) 箱式木棺北端部に塊状に残存	未分析	(管内) 出土遺物なし (第1主体上面) 管台2、管1、管環9、 管輪等2、石輪1 (第2主体上面) 管台1、注口土器1、高杯2 管台1
7	神原神社古墳 (大原郡加茂町)	方墳(30×25m) 整穴式石室1基(U字形粘土床) 床面中央部、鉄鎌矢羽部に残存、 埋納土器内に塊状に残存 石室壁面の板状割石小口部に付着	水銀朱 X線分析法と 蛍光X線分析 (1988)	(管内) 三角形管輪1、黒曜石太刀1、 太刀1、管1、鉄輪3個、管台1、 管1、ナガサキ管1、管1、管2、 管輪2 (埋納土器) 管2、管3 (石室石上) 管5個以上、円形土器7 個以上
8	松本1号墳 (飯石郡三刀屋町)	前方後方墳(全長50m) 墳頂部に2基の主体部 (第1基) 箱式木棺(粘土床)床面中央部の 2.6mの範囲に堆積 (第2基) 割竹形木棺(粘土椽)床面中央部 2箇所に残存	水銀朱 湿式定性分析 (1963)	(第1主体部内) 斜線管輪1、刀子3、 小形管形鉄管1、管輪7、 ガラス小玉54 (第2主体部内) 鉄管1、碧玉管管玉、 鉄管小片
9	釜代1号墳 (松江市西浜佐陀町)	楕円形墳(20×16m) 墳頂部に2基の主体部 (第2基) 割竹形木棺(粘土椽)床面2箇所に 残存 (須崎焼跡) ペンガラ、水銀朱若干 (須崎焼跡) ペンガラ若干	ペンガラ及び 水銀朱 X線分析法と 蛍光X線分析 (1994)	(第1主体部直上) 管形管台2、管環6、小形 丸管輪1、直口管2 (第2主体部内) 内径花文管1、勾玉1、 ガラス小玉67、木片
10	斐伊中山2号墳 (大原郡加茂町)	丘陵庵根を加工して15×12mの平坦面 を造る。墳頂部に6基の主体部 (第4基) 割竹形木棺(粘土椽)床面の中央部 (副葬品位置)に残存	水銀朱 X線分析法と 蛍光X線分析 (1993)	(管内) やりがん1、刀子1、 割線式真鍮管1
11	斐伊中山14号墳 (大原郡加茂町)	丘陵庵根を加工して4.5×6.2mの平坦 面を造る。1基の主体部 箱式木棺底、20×30cmの範囲で1箇所に 残存	水銀朱 X線分析法と 蛍光X線分析 (1993)	(管内) やりがん1

No.	名称・所在地	遺跡の概要及び所在地	種別・分析法	その他出土遺物
12	神原正面北E-5号墳 (大原郡加茂町)	方墳(規模不明) 墳頂部に6基の主体部 (軒柱) 箱式木棺床面に残存(磁器類)	未分析	(中央主体部内) 鉄1 (主体部直上) 鉄平、磁器類、土
13	小屋谷3号墳 (八束郡八雲村)	長方形墳(19×15m) 墳頂部に2基の主体部 (軒柱) 床面頭位部分25×33cmの範囲に 残存、厚さ最大1cm	ベンガラ 発光分光分析 (1983)	(第1主体部内) 刀、木片、西行文鏡1
14	奥才14号墳 (八束郡鹿島町)	円墳(径16m) 墳頂部に2基の箱式石棺 (軒柱) 棺内出土内行花文鏡の鏡背部に 付着	未分析	(第1主体部内) 内行花文鏡1、方鏡文鏡1、 鍔玉鍔部彫彫彫彫彫彫1、 (第1主体部外) 漆器短大刀1、鉄鍔1、 鉄鍔2、中弓かんかん2、 刀子1、不明鉄器4 (第2主体部内) 鉄鍔1、鉄鍔1、刀子1
15	奥才34号墳 (八束郡鹿島町)	方墳状の墳丘(11×8m) 0.8×0.6mの隅丸方形土壇に土師器壺 を据え、小形堂で蓋をする、内部に礫 が充填していた 壺内上部の礫にはベンガラが付着し、 さらに微量の水銀朱が検出された	ベンガラ及び 水銀朱 5μmコマツグラフと 放射線量による微量化学分析 (1986)	(壺内) 鍔玉短石刀1、鍔文鏡1、 鍔玉短石刀1、鍔部短石刀1
16	中山2号墳 (八束郡八雲村)	方墳(13×9.5m) 墳頂部に2基の主体部 2基の主体部の中央部(軒柱部)に塊状 に残存	水銀朱 発光分光分析 (1983)	木と共伴して鉄鍔5 (第1主体) 漆器鍔部短石刀、手づね土器1 (第2主体) 刀子、漆器彫彫彫彫
17	道仙3号墳 (松江市下東川津町)	方墳(10×9.6m) 墳頂部に木棺1、壺棺2 箱式木棺床面の20×20cmの範囲に残存	未分析	(木棺内) 鉄鍔1
18	道仙5号墳 (松江市下東川津町)	方墳(一辺16m) 墳頂部に主体部1基 主体部床面に少量残存	未分析	出土遺物なし
19	鹿壳塚古墳 (安来市黒井田町)	前方後円墳(全長約50m) 後円部に舟形石棺1 棺身内面に丹、人骨頭部に朱が付着	未分析	(棺内) 金銅短石刀3、鉄鍔2以上、 (棺外) 鉄刀子1、鉄鍔3以上
20	仲仙寺1号墳 (安来市西赤江町)	円墳(径15.9m) 墳頂部に箱式石棺1、壺棺1 石棺内側及び蓋石裏面に丹着	未分析	(棺内) 鉄片 (棺外) 土師製大形彫彫彫彫彫、漆器鍔部片 円筒形銅片
21	仏山古墳 (安来市荒島町)	円墳 墳頂部に箱式石棺1基 箱式石棺内部に塗彩	未分析	(棺内) 磁器短大刀、刀子、鍔部、斧、金銅器 鍔部、鍔部短石刀2、鍔部2、鍔部 欠之、鍔1、鍔1、鍔1、均玉1
22	谷山古墳 (安来市安来町)	墳形不明 舟形石棺?蓋石内面に付着	未分析	出土遺物不明
23	西万田嶋神社境内 古墳 (平田市万田町)	円墳 石棺蓋内面に塗彩	未分析	削
24	神田所在古墳 (福岐郡布施村)	前方後円墳、石室あり 椁内に残存	未分析	
25	川子谷B-1号墳 (大原郡加茂町)	方墳(9.8×7.3m) 墳頂部に主体部1基 箱式石棺内に人骨2体分 1号人(後葬:♀)、2号人(先葬:♀) 2号人♀の頭骨顔面部分及び頭位推定 原位置床面に残存、白骨化後に塗布	水銀朱  X線分析法と 蛍光X線分析 (1993)	出土遺物なし
26	二子塚古墳 (松江市上乃木)	方墳(一辺18m) 主体部形状不明、 墳丘基盤上検出の土師器椁底内面に残 存	ベンガラ 5μmコマツグラフと 放射線量による微量化学分析 (1986)	(主体部?) 短刀1、鉄鍔2、 (高塚中及び墳丘表面) 円筒形銅、鍔部1、 漆器鍔部1、漆器鍔部1、漆器鍔部片

No.	名称・所在地	遺跡の概要及び所在地	種別・分析法	その他出土遺物
27	奥山B-1号横穴 (松江市浜乃木)	四注式家形平入(玄室2.2×2.4m) 人骨3体(性別不明, 内1体は幼児) 墓道周辺から出土した壺内側に痕跡として残存	ベンガラ 放射線分析 放射線による微量化学分析 (1986)	(玄室内外) 磁器製玉子1, 刀子2, 漆器類3 平瓦1, 磁器類17, 瓦1, 瓦片2, 磁器類1
28	高津久横穴 (福成郡海士町)	須惠器内に残存	ベンガラ 発光分光分析 (1983)	
29	弥生原4号穴 (松江市乃白町)	便化家形平入(玄室2.8×2.7m) 玄室床面3箇所に少量残存 玄室内須惠器坏壺内に塊状に残存	ベンガラ 発光分光分析 (1983)	(玄室内) 刀子1, 平瓦16, 平瓦18, 瓦片5, 磁器類2, 磁器類1, 瓦1, 土師器類1, 磁器類3, 磁器類12, 刀子1, 瓦片1
30	黒鳥2号穴 (安来市黒井田町)	四注式系三角形断面平入(玄室1.6×2.4m), 3体の人骨と乳児の歯 1号人(?), 2号人(♂), 3号人(♀) 1号人頭蓋骨及び上下顎歯の外面に点状～斑状に付着, 白骨化後に塗布	ベンガラ 放射線分析 放射線による微量化学分析 (1983)	(玄室内) 刀子3組, 平瓦1, 磁器類1, 平瓦1, 刀子2, 磁器類2, 刀子1, 瓦片1 (墓道及び内側部) 磁器類1, 平瓦1, 瓦片1, 磁器類2, 大小磁片
31	矢田II群1号横穴 (安来市矢田町)	丸形天井(玄室3.8×2.7m) 横口式家形石棺1, 屍床1 石棺内外面に丹彩の痕跡	未分析	(玄室) 磁器類1, 刀子1, 瓦片1, 平瓦1, 瓦片1, (前庭) 平瓦1, 平瓦2, 瓦片1, 磁器類内側面瓦1個片
32	東光台横穴 (松江市東津田町)	四注式平入(玄室2.25×2.0m) 組合式箱式石棺の壁板2枚の内側に付着	未分析	出土遺物不明

第6表 鳥根県内赤色塗彩遺物出土遺跡一覧表

No.	名称・所在地	遺跡の概要及び所在地	種別・分析法	その他出土遺物
1	五明田遺跡 (飯石郡嶺原町)	縄文時代後期の河原段丘上の集落跡 溝状遺構1, 貯蔵穴状土坑7 深鉢, 浅鉢合計17片の外面縄文帯に付着	未分析	漆片, 漆片, 赤土製等の磨製粘土器, 磨製粘土器, 石器(石斧, 石錘, 石鏃, 石錐, 石鏃, 石片)
2	布田遺跡 (松江市竹矢町)	弥生前期後半～中世の複合遺跡 弥生時代旧河道第2層中から検出された弥生中期の壺片4片の口縁部または頸部外面文様帯に付着	ベンガラ X線分析法と 蛍光X線分析 (1991)	縄文土器(漆片, 漆片), 弥生土器(壺, 甕, 鉢, 平瓦, 漆塗土器類), 土師器(甕, 甕台盤), 須恵器, 陶磁器類, 土製品(分銅形土製品, 磨製土製品類), 石器, 木製品
3	タテチョウ遺跡 (松江市西川津町)	縄文時代～中世の複合遺跡 弥生中期の櫛17点に朱漆で塗彩	水銀朱 蛍光X線分析 (1990)	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 須恵器, 陶磁器類 石器, 木器, 漆器類
4	西谷3号墓 (出雲市大津町)	四隅突出形墳丘墓(50×40m) 第1主体部直上供献土器中の壺類, 高坏 ・甕台, 低脚坏に塗彩されたものあり	水銀朱 橋谷博氏鑑定 (1992)	(第1主体部内) ガラス製玉子, 漆器類 玉子, ガラス小玉
5	石屋古墳 (松江市東津田町)	方墳(一辺40m)主体部未調査 墳裾遺出部から検出された形象埴輪片に赤色と緑色の顔料が塗彩されていた	(赤)ベンガラ (緑)岩織青 放射線分析 放射線による微量化学分析 (1990)	(墳裾) 内側埴輪, 形象埴輪, 須恵器類, 須恵器類, 土師器類, 土師器類
6	十王面横穴群 (松江市矢田町)	4号穴前庭部出土の土師器皿底部片外面に塗彩されていた, 合計3個体分	未分析	(玄室内) 磁器類25, 瓦形人物像1, (前庭部) 磁器類19, 平瓦1, 磁器類1, 瓦器類2, 磁器類2
7	池ノ奥2号墳 (松江市大井町)	山寄せの円墳(径9m) 横穴式石室1基, 周溝中に円筒棺1 石室羨道部出土の坏片に付着して残存	ベンガラ 放射線分析 放射線による微量化学分析 (1990)	(玄室内) 平瓦5, 平瓦5, 瓦片他 (墓道部) 小形器, 瓦片他

No.	名称・所在地	遺跡の概要及び所在地	種別・分析法	その他出土遺物
8	池ノ奥遺跡群 (松江市大井町)	南向きの斜面に須恵器窯3基 3号土壌(3.7×7.2m)中須恵器群に混 じって塗彩された土師質土馬が2体	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 発光試薬による微量化学分析 (1990)	(土師中) 壺形器37, 高坏4, 甕4, 飯 坪2, 皿1, 台付甕1, 高脚甕1, 皿1, 蓋1, 富鉢若干
9	池ノ奥A遺跡 (松江市大井町)	南向き斜面の住居跡, 祭祀関連遺構 土壌3, 土器群2, 焼土遺構他 土器群から検出された50片以上の盤, 坏身片(7c系-8C系)に塗彩されていた	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 発光試薬による微量化学分析 (1990)	(須恵器) 壺形, 甕, 甕, 内面刷 (土師器) 壺, 甕, 瓶, 支脚, 手づ(む土器 (その他) 土馬5体以上, ミニチュア支脚1, 土器32, 円面刷1, 灯明皿2
10	イガラビ遺跡 (松江市大井町)	山裾及び谷間の祭祀跡または土師器生 産地, 掘立柱建物跡1棟, ビット多数 円形焼土塊11基他 C-3, D-3区土器溜り中, SB-01のビット 中, SD-01, 02中から検出された57点以 上(8c群-8)の土師器片に塗彩されて いた。器種は坏, 皿類, 高坏, 壺, 鍋	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 発光試薬による微量化学分析 (1990)	(須恵器) 壺形, 甕, 高坏, 甕, 模範地 (土師器) 壺, 甕, 坪, 支脚他 (その他) 土馬5体以上, ミニチュア支脚1, 土器32, 円面刷1, 灯明皿2
11	高広遺跡 (安来市黒井田町)	横穴墓13穴, 竪穴住居跡1棟, 掘立柱 建物跡延べ63棟 W-2号穴前庭部出土皿, SB-20, 27, 28出 土皿, 高台付坏, 壺胴部破片に塗彩さ れたものあり(いずれも奈良時代)	未分析	縄文時代〜平安時代にかけての土師器, 石器, 土製品, 鉄器, 金銅製鋸歯大刀, 金
12	菅沢谷横穴群 (松江市乃白町)	横穴墓13穴 A-3号横穴墓玄室内出土高坏, 脚付短頸 壺に塗彩されていた	未分析	(A-3号玄室内) 坏蓋2, 坏身2, 高坏2, 脚付短頸壺1
13	堤廻遺跡 (松江市西川津町)	集落跡, 竪穴住居跡21棟, 掘立柱建物 跡2棟 SI-01出土長頸壺の体部外面頸〜口縁部 にかけての内外面に塗彩 同出土高坏の脚部外面及び坏部内外面 に塗彩されていた	未分析	(SI-01) 坏蓋1, 皿1, 土師器破片1
14	四王寺跡 (松江市山代町)	寺院跡 均整唐草文軒平瓦下面部に付着	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 発光試薬による微量化学分析 (1988)	軒平瓦, 軒平瓦, 須恵器, 土師器, 陶磁器類, 磁器
15	史跡出雲国府跡 (松江市大草町)	国衙跡 昭和45〜47年の発掘調査で後殿, 後方 宮衙, 大溝, 欄列, 井戸等が検出され 坏蓋, 坏身, 釵等, 合計13個に塗彩さ れたものが見られた	未分析	須恵器, 土師器, 瓦, 木瓦, 漆器, 皿, 土器, 石臼, 碧玉, 水晶, 糸子の刺糸, 磁石等
16	芝原遺跡 (松江市福原町)	鳥根郡家推定地 SX-01出土の土師器坏, 皿に丹塗りのも のがあった	ベンガラ ろ紙クロマトグラフ法と 発光試薬による微量化学分析 (1988)	壺形土器, 甕土器, 須恵器, 土師器, 木器, 陶磁器類, 石器

## (2) 釜代1号墳出土の内行花文鏡について

青銅鏡は中国において前13世紀、殷の時代に起源するが、中国では春秋時代から戦国時代を経て漢代になっていわゆる漢鏡が成立し、広く普及した。中国での墳墓における副葬例は一人一面の原則が見られ、日本のように一人の埋葬にあたって多数の鏡を副葬する例は見られない。また、湖南省馬王堆1号墓では化粧箱に納められて鏡が一面発見された例があることなどから、中国においては鏡に呪力を認めることはあっても、主に生活の場において姿見や化粧道具として使用されていたと推定されている<sup>(註1)</sup>。

日本列島に青銅鏡が最初にもたらされたのは弥生時代後期末で、青銅製の武器類と共に朝鮮半島にもたらされた多鈕細文鏡である。この鏡が中国鏡と決定的に違うのは、鏡面部が凹面となっている点で、これは朝鮮半島において鏡が実用的な映像の具としてではなく、集光反射板としての機能を活かした太陽神の依代、またはそれを象徴する呪具としての認識があったことを窺わせる。すなわち中国で成立した中国鏡は朝鮮半島を通して鏡が呪具または祭器であるという概念とともに日本に伝わったということが言える。

弥生時代中期には中国大陸で漢鏡から北九州を中心に日本に船載され、弥生後期には東は近畿地方にまで普及するが、最初に朝鮮半島から鏡と共に伝わった呪具、祭器という概念は日本人の意識の中に深く根差していたようで、そのために中国からの船載鏡は日本では珍重され、権力者の墳墓にはさかんに副葬され、破片となった鏡でさえ呪力を認めているようである。また、この頃から船載鏡の輸入が追いつかなくなったためか日本においても漢鏡を模倣した仿製鏡の製作が始まると言われている。

弥生～古墳時代にかけての墳墓から出土する青銅鏡には、様々な種類が知られているが、それらの中で代表的なものとしては「三角縁神獸鏡」、「方格規矩鏡」、「内行花文鏡」などが出土例も多くよく知られている。

鳥根県内での出土例を集成したものが第7表である。本墳出土例を含めて現在43面が知られ、その内訳は、三角縁神獸鏡5面、方格規矩鏡2面、斜縁二神二獸鏡2面、斜縁帯鏡1面、内行花文鏡8面、珠文鏡、乳文鏡、櫛歯文鏡等を含めたその他の鏡種のもものが21面、鏡種不明のもものが4面である。

本墳から出土した青銅鏡は「内行花文鏡」に属すが、この鏡種は三角縁神獸鏡や方格規矩鏡などに見られるように、その文様構成に四神や霊獣などを使わず、幾何学文様を基調としている点に特徴がある。内行花文鏡の仿製が始まった頃に手本とされた漢鏡は、福岡県平原遺跡の出土例に代表されるように平縁を持ち、天を象る蓋笠を表現した8連の円弧(8弧文)を内区に置き、その外周に櫛歯文帯ではさんだ雲雷文帯を配し、また各弧間には蓋笠を支える柱や垂幕を縛り上げた紐を表わす小単位文を置き、鈕には「長宜子孫」等の吉祥句からなる銘文を間に配した四葉文座を持つものであると言われている。日本国内において製作が始まってから後には様々な面径を持つものが知られ、最大46.5cmを測る福岡県平原遺跡出土例のものから10cm以下のものまで幅広く見られる。これは仿製の三角縁神獸鏡が直径21～24cmの範囲内で作られ、規格があったらしいことは対称的であり、その点では製作者の自由な意匠が反映されているかのようなようであるが、内行花文鏡の面径にも幾つかのピークがあったり分類でき、文様構成との相関関係が見られるようである。すなわちそれは26cm以上の超大型鏡の一

群と、17cm前後の中型鏡、9～11cm程度の小型鏡がある。この内超大型鏡の部類に属するものは面数が少なく特殊であり、後二者が一般的で、中でも特に多く見られるのが9～11cmの小型鏡である。これらをその文様構成と照らし合わせてみると、中型鏡～大型鏡に入る面径を持つものには、「八弧文」、「雲雷文帯」、「四葉文鈕座」、「弧間の小単位文」など、手本とした漢鏡の中に見られる文様要素の内、全てではないにしても大部分を色濃く残すものが多いが、小型鏡の部類に入る面径を持つものには、「6弧文」を持つものが7割以上を占め、漢鏡に見られたその他の文様要素は欠落したものが多くなり、逆に漢鏡には見られなかった「鋸歯文帯」が外周に巡るなどの新たな文様要素が取り入れられ、中には鏽上がりも粗雑なものが見られるようになるため、時代と共に小型化し、8弧文鏡から6弧文鏡へ、またその他の文様構成は漢鏡に忠実なものから簡略化したものへと推移することが考えられている。<sup>(註2)</sup>

本墳出土の例を照らし合わせてみると、面径は11.4cmで6弧文を持ち小型鏡の部類に属する。鈕座には円鈕の周面に2重の細い界線を巡らせるだけで「四葉文」の省略された様子が窺われる。6弧文の外周には1条の連珠文帯をはさみ形で櫛歯文帯が2条巡っている。漢鏡では2条の櫛歯文帯の中には雲雷文帯を配するため、ここでは雲雷文帯が変化して連珠文帯に置き換えられたとみるべきであり、あるいは雲雷文帯の中に見られる渦文が珠文に変化したものであろうとも考えられる。特筆すべき点は、本墳出土例で見られるような「櫛歯文+連珠文+櫛歯文」という文様構成を持つ類例は他にほとんど見られないことであり、現時点では宇部市松崎古墳出土例(PL-8, 下段)しかない。また、「櫛歯文+連珠文」<sup>(註4)</sup>、「櫛歯文+櫛歯文」<sup>(註5)</sup>の例は小型仿製内行花文鏡の中では類例が多く見出される。本墳出土例のような希少な例をどう捉えるかにもよるが、後二者に比べて本墳出土例の文様構成の方が漢鏡には忠実であるものと考えられる。最後に「弧間の小単位文」については本墳出土例にも見られるものであり、小さな珠点から細くヒゲ状に3本の枝を伸ばしており、やや退化した感は否めないものの、文様自体は欠落していない。総合的に見て本墳出土の鏡には欠落した文様要素も見られるものの、漢鏡の名残りを留める部分も多くあり、また鏽上がりも良く、文様の仕上がりがシャープな秀作であると言える。

註1) 田中琢「古鏡」日本の原始美術8、講談社、昭和58年

註2) 田中琢「鐸・剣・鏡」日本原始美術大系4、講談社、昭和52年

註3) 「松崎古墳」(宇部市文化財資料第1集)宇部市教育委員会、1981年

註4) 広島県小谷1号墳、奈良県橿原町野山2号墳、羽曳野市御旅山古墳、高松市柳鉢谷古墳、熊本県八代市谷川、等の出土例がある。(樋口隆康氏の教示による)

註5) 奈良県橿原町丸尾5号墓、備前市丸山古墳、岐阜県船木山24号墳、熊本県八代市谷川、坂出市ハカリゴロ、等の出土例がある。(樋口隆康氏の教示による)

補記) 本墳出土鏡については、現在東京国立文化財研究所保存化学部化学研究室長の平尾良光氏により鉛同位体比分析及び蛍光X線分析法による分析が試みられており、その結果によりさらに本墳出土鏡の性格が浮き彫りにされるものと思われる。

第7表 高根県内古鏡出土遺跡一覧表

No.	名称・所在地	鏡種	墳形・規模・概要	その他出土遺物
1	寺床1号墳 (八束郡東出雲町)	斜縁二神二獸鏡 (第1主体, 径約13cm)	方墳 (27.5x22.3m) 第1: 割竹形木棺(遺跡) 第2~第6: 土塚	(第1主体) 鉄製大刀1, 鉄削1, 中々鉄鍔3個, 穂玉型勾玉1 (墳丘中) 鉄形器台, 高杯(小台型)
2	道山1号墳 (安来市荒島町)	三角縁三神三獸獸鏡 (第1主体, 径24cm) 方格規矩鏡 (第1主体, 径17.4cm) 方格規矩四神鏡 (第2主体, 径19cm)	方墳 (一辺約60m) 竪穴式石室2基	(第1石室) ガラス製管玉, 刀身片 (第2石室) 穂玉型鍔部, ガラス製管玉, 刀身片, 刀身片 (墳丘) 埴土製土器片断多数
3	道山3号墳 (安来市荒島町)	斜縁二神二獸鏡 (石室内, 径15.4cm)	方墳 (58x44m) 竪穴式石室(跡)	(石室内部) 穂玉型管玉30, ガラス製小玉33, 刀身1, 中刀身4 (墓室埋土中) 鏡, 鏡形器台, 小形丸鏡蓋, 小形板鏡片
4	大成古墳 (安来市荒島町)	三角縁唐草文帯二神二獸鏡(石室内, 径23.4cm)	方墳 (65x53m) 竪穴式石室(遺跡?)	(石室内部) 環状大刀1, 鉄身3, 環状刀2, 小形丸鏡蓋3, (墳丘埋土中) 鏡身土製口部片1
5	神原神社古墳 (大原郡加茂町)	景初三年銘是作置列式三角縁神獸鏡 (石室内, 径23cm)	方墳 (35x30m) 竪穴式石室(跡)	(石室内部) 高根型大刀1, 大刀1, 削2, 鏡蓋36, 丸鏡1 削1, 中々鉄鍔1, 管1, 針1, 釧2, 鉄片2 (石室蓋石上) 穂玉型鍔以上, 円筒形土製7層以上 (墳丘埋土中) 穂玉型鍔 穂玉型鍔
6	松本1号墳 (飯石郡三刀屋町)	斜縁獸鏡 (第1主体, 径13cm)	前方後方墳 (全長50m) 第1: 箱式木棺(土塚) 第2: 割竹形木棺(土塚) 第3, 4: 土塚	(第1主体) 鉄削刀3, 小形板鏡蓋1, 鏡片7以上 ガラス小玉54 (第2主体) 鉄削1, 穂玉型管玉1, 鉄削小片 (第3, 4主体) 土製土器類 (前方部埋土中) 高杯1, 鏡片1 (前方部北側) 管3, 小形丸鏡蓋1, 高杯1 (前方部東側) 釧1, 管1 (前方部南側) 釧1, 高杯12
7	八日山1号墳 (松江市新庄町)	三角縁波文帯四神二獸鏡 (径21.85cm)	方墳(推定一辺23.5m) 内部主体不明	
8	古城山古墳 (八束郡東出雲町)	位至三公銘内行花文鏡 (棺内, 径16.3cm)	方墳 (一辺約20m) 割竹形木棺(遺跡)	鏡形器台1
9	小麗谷3号墳 (八束郡八雲村)	四子文鏡 (第1主体, 径9.5cm)	方墳 (19x15m) 土塚2基	(第1主体) 刀1, ベンガラス, 木片 (第2主体) 土製土器類
10	奥才14号墳 (八束郡鹿島町)	内行花文鏡 (第1主体, 径18cm) 方格文鏡 (第1主体, 径11cm)	円墳(径16m) 石棺2基	(第1主体内部) 穂玉型鍔部形石製品1 (第1主体外部) 高根型大刀1, 鉄削1, 鉄削2, 中刀身片 2, 刀身1, 不明器4 (第2主体内部) 鉄削1, 管蓋1, 刀身1
11	奥才34号墳 (八束郡鹿島町)	板文鏡 (鑿内, 径7.8cm)	方墳 (10x5m) 不整形円形土塚内に竪	(墳内) 穂玉型石削1, 穂玉型管玉1, 鏡蓋型管玉1, 赤色銅片数個
12	奥才12号墳 (八束郡鹿島町)	珠文鏡 (第3主体, 径6.7cm)	方墳 (17x14m) 土塚3基 (第1主体土塚部, 第2, 3主体土塚)	(第1主体) 刀身1, 環状鉄器1 (第2主体) 土製土器類 (第3主体) 穂玉型管玉3 (土塚中) 穂玉型管玉3
13	月廻番外3号墳 (松江市法吉町)	盤鏡 (墓塚中, 径10.5cm)	方墳 (一辺23m) 土塚1基	(土塚中) 穂玉型管玉3
14	小谷土塚墓 (安来市切川町)	内行花文鏡 (第1主体, 径8.2cm)	自然丘陵の頂部を東西8m, 南北5mの範囲で平坦に加工し, そこに2基の土塚を穿つ	(第1主体) 刀身1 (第1土塚) 高杯, 銅形器, 銅形器身, 器台 (第2主体) 中刀身片
15	客山1号墳 (松江市新庄町)	九乳文鏡 (土塚内, 径9.2cm)	方墳 (10.5x9.5m) 土塚1基	(土塚中) 釧4, 刀身2, 穂玉型管玉5, ガラス小玉6 (土塚上) 土製土器類断片
16	金崎1号墳 (松江市西川津町)	内行花文鏡 (石室内, 径6.8cm)	前方後方墳(全長32m) 竪穴式石室1基	(石室内) 高根型鍔部形石製品1, 環状鍔部1, 削1, U 字形鍔片1, 刀身1, 中刀身2, 穂玉型管玉5 穂玉型管玉4, 穂玉型管玉2, 環状鍔部1, 水 晶製器台1, ガラス小玉多数, 環状鍔部玉多数, 環状鍔(銅片)1, 高杯1, 鏡形器身小片1, 器台1, 釧4, 高杯高杯5 (前方部中央) 人物輪, 埴形輪

No	名称・所在地	鏡種	墳形・規模・概要	その他出土遺物
17	箕部山古墳 (松江市西川津町)	四乳鏡 (径9.5cm)	墳形、規模不明 (箱式棺?)	刀2、鉄鏡、漆器製有孔円筒、土師器(小形4、小形5)1、 須磨器(器2、有蓋器1、無蓋器1、埴器3、埴器6、小形器1、大型器2)
18	築山古墳 (八束郡玉湯町)	位至三公銘双竜鏡 (径8.0cm)	円墳(径約16m) 舟形石棺2基	鉄鏡1基、銅鏡筒状鏡、勾玉、管玉、丸玉、小形鏡、 刀劍類
19	上島古墳 (平田市国富町)	五鈴鏡 (石棺内、径10cm)	円墳(径約15m) 墳頂部に家形石棺1基 直葬と壘穴式石室1基	(石室内) 銅鏡1、銅鏡筒状器5、ガラス小玉152、ガラス 丸玉22、鉄鏡、刀2、骨刀1、金銅製金具6、 鉄金具1、射状鏡片2、須磨器等可成鏡 (石室内) 鉄鏡1基、石突1、鉄金具、器2、埴器4、古鏡7
20	御崎山古墳 (松江市大草町)	珠文鏡 (石室内、径8.2cm)	前方後方墳 (全長41m以上) 横穴式石室1基、玄室 内に家形石棺2基	金鏡2、鉄鏡2、金銅鏡4、銅鏡筒状刀1、太刀2、鉄鏡、 サシ1、真珠(器器1、辻金具1、管1、古真1、家形金具2) 鉄鏡2、鉄鏡1、須磨器(大玉1、透鏡1、真珠鏡2、有蓋器、 器2、射状鏡1、真珠2、有蓋器1、埴器6、土師器等1)
21	岡田山1号墳 (松江市大草町)	長宜子孫銘内行花文鏡 (石室内、径10.6cm)	前方後方墳(全長24m) 横穴式石室1基、玄室 内に家形石棺1基	銅鏡太刀1、円筒太刀1、土師太刀1、刀子3、金銅製丸玉11、 鐵鏡筒2、馬具(鍔一対、加金具1、鍔金2、辻金具4、鉄 2、柄7)、須磨器(器1、器1、真珠1)
22	古天神古墳 (松江市大草町)	変形五獣鏡 (石室内、径13.6cm)	前方後方墳(全長25m) 石棺式石室	円筒太刀1、刀身短口、刀身短口、金鏡2、鏡器3、馬具(鍔 短口、鍔短口)、須磨器(射状鏡1、真珠1、器1、埴器2)
23	麗ノ湯病院跡横穴 (安来市植田町)	珠文鏡 (玄室内、径7.7cm)	横穴墓	鉄鏡筒状玉、須磨器等短太刀、金銅製短立烏、真珠短口、 舟形刀子
24	斐伊中山2号墳 (大原郡木次町)	細線式鳥獸鏡 (第4主体、径12.1cm)	地山整形により15×12 mの平坦面を造る (第1-2・5-6:土境、第3:遺灰、 第4:粘土層)	(第3主体) 鏡? (第4主体) 中形小形、刀子、水鏡、鉄器製銅片 (第6主体) 鉄鏡1 (遺物) 長刀を伴う土師器等(器1、埴器等3)
25	山地古墳 (出雲市神西沖町)	二神二獣鏡 (第1主体、径12.6cm) 珠文鏡 (第2主体、径8.0cm)	円墳(径24m) 主体部4基 (第1:土境、第2・3:遺灰、第4:遺 灰)	(第1主体) 銅形銅鏡2、真珠6、小形丸鏡器1、溝口器2 (第2主体) 勾玉1、ガラス小玉67 (第3主体) 鉄形銅鏡1 (第3主体) 出土遺物なし
26	四塚山古墳群 (益田市下本郷町)	三角縁神獸鏡 (径21.8cm)	墳形、規模不明 箱式石棺?	
27	釜代1号墳 (松江市西浜佐陀町)	内行花文鏡 (第2主体、径11.4cm)	横円形墳(20×16m) 粘土塚2基	(第1主体) 鉄形銅鏡2、真珠6、小形丸鏡器1、溝口器2 (第2主体) 勾玉1、ガラス小玉67
28	小丸山古墳 (益田市乙吉町)	珠文鏡 (掘土中、径7.3cm)	前方後円墳(全長52m)	(掘土中) 真珠1、本地金銅製短立烏、管金具1、鉄鏡片、 須磨器片(器等鏡、真珠、須磨器)並
29	神代古墳 (大原郡大東町)	小形獸形鏡	円墳(径8m) 箱式石棺?	刀2、須磨器片1
30	今若峠1号墳 (安来市飯生町)	内行花文鏡	方墳(一辺25m?) 長持形石棺	
31	大崎山古墳群 (邑智郡石見町)	御倉文鏡	墳形、規模不明 箱式石棺	須磨器
32	めんぐろ古墳 (浜田市治和三宅)	乳文鏡	円墳 横穴式石室1基	(石室内) 本地切子玉1、鉄鏡1、三輪式金具4、重刀1、 鍔短口鏡1、石突1、管1、真珠3、鐵鏡1、鉄鏡 金銅製円形鏡金具1、加金具1、須磨器
33	輪ノ鼻50号墳 (益田市遠田町)	乳文鏡	墳形、規模不明	
34	鳥越山遺跡 (八束郡東出雲町)	鏡種不明	概要不明	
35	大念寺古墳 (出雲市今市町)	鏡種不明	前方後円墳(全長92m) 横穴式石室1基	須磨器、馬具並
36	明神古墳 (瀬戸郡仁摩町)	鏡種不明	墳形、規模不明	
37	周布川河原 (浜田市周布町)	内行花文鏡 (径7.6cm)	概要不明	
38	苗代田東方丘陵南 (隠岐郡五箇村)	乳文鏡 (径10.5cm)	概要不明	
39	丸山1号墳 (隠岐郡五箇村)	鏡種不明 (径8.0cm)	墳形、規模不明	

## 6. ま と め

今回の調査では古墳2基の調査を実施し、横穴墓2基を発見した。調査結果を要約すると下記のとおりである。

(1) A地点寺津11号墳は、南北長10m、東西幅8.5m、墳裾からの比高約1mを測る隅丸長方形の古墳である。工事により削平される墳丘南側半分についてのみ調査を実施した。その結果墳頂部で1基の主体部が検出された。内部主体は東西長3.45m、南北幅1.7mを測る墓壇中に礎床を持ち、規模は2.3m×0.35~0.45mを測る。主体部中及び墳丘中からの出土遺物は検出されなかったため、築造時期は不明であるが、出雲地方で古墳時代中期に見られる通有のものと推定される。(P.17)

(2) B地点ではT-9、10の2本のトレンチを設定したが、遺構、遺物は発見されなかった。また1箇所横穴墓の存在を思わせる地形が確認されたが工事計画から除外されたため、未調査である。(P.21)

(3) C地点釜代1号墳は、長軸方向推定約20m、短軸方向16m、墳裾からの比高2.5mを測る楕円形の墳丘を持つ古墳であることがわかった。主体部は墳頂部で2基並行して存在することが判明した。土層観察の結果、第1主体部が先葬であると考えられる。調査は第1主体部直上の落込埋土を掘り上げ、第2主体部を完掘した時点で工事計画の変更により現状保存が決定したため、第1主体部棺内の調査を残して埋め戻し、調査を終了した。(P.23)

(4) 1号墳第1主体部直上落込埋土中からは、鼓形器台2個体、高坏6個体、小形丸底壺1個体、直口壺2個体が検出された。これらの供献土器は、土器の形態の特徴から山陰地方でのいわゆる「小谷式」(古墳時代前期)の範疇に属するもので、これを以て本墳の築造年代と考えられる。

(P.23, P.28 第11図, P.29 第12図)

(5) 1号墳第2主体部は、6.8m×2.8~3.5mを測る長方形の大規模な墓壇中に粘土槨を伴う割竹形木棺を安置したもので、木棺の大きさを粘土槨の内法から推定すると、長さ5.4m、幅0.7~0.55mを測る長大なものとなる。この粘土槨は島根県内では3例目となるが、先例の飯石郡三刀屋町松本1号墳第2主体部(4.7m×0.87~0.6m)、大原郡木次町斐伊中山2号墳第4主体部(4.8m×0.6m)に比して現時点では最大の規模を持つものである。(P.31, P.35~36 第15図)

(6) 1号墳第2主体部棺内からは内行花文鏡1面、玉髓(碧玉)製勾玉1個、ガラス小玉67個が検出された。また粘土槨床面2箇所には赤色顔料が残存している部分が認められたが、分析の結果、資

料A（玉類周辺）からは微量の水銀朱と極微量のベンガラ小塊，資料B（小口部付近）からは極微量のベンガラ（？）粒子が検出され，水銀朱は被葬者の頭胸部に塗布されたもの，ベンガラは鏡に付着していたものが流出したものであると考えられる。

（P.32, P.35～36 第15図，P.37 第17図，P.38～41, P.44～51）

(7) 1号墳第2主体部出土の内行花文鏡は，面径11.4cmを測るもので，鏡背部には6弧文帯を持ち，その外周には1条の連珠文帯を挟むかたちで2条の櫛歯文帯を持つものである。この外区文様帯の構成で類似する例としては，山口県宇部市「松崎古墳」出土例が知られる程度であり，非常に稀少なものであると言える。また鏡背部文様帯には赤色顔料，鏡面部には布目痕跡が付着していた。このうち顔料については分析の結果，ベンガラが検出され，鏡は赤色塗彩されたものであると考えられるが，いつの時点で塗彩されたものかは不明である。

（P.38～39, P.47～51）

(8) C地点T-4では横穴墓が1基検出され，北小原3号穴と命名した。前庭部堆積土を半掘し，羨門部を検出した段階で現状保存が決定したため，前庭部堆積土の土層を記録した段階で調査を終了した。よって調査は玄室内部まで及んでいないが，羨門部からの観察では整美に加工された玄室を持ち，床面には板石の屍床を三方に配した構造であるように見られた。

（P.42 第20図，P.43）

(9) C地点T-7では地山の加工が見られ，横穴墓の存在が推定されたため，「北小原4号穴」と命名した。この時点で現状保存が決定したため，調査を終了した。

（P.43）

(10) D地点では横穴墓の存在が推定されたため，T13～16を設定する計画となっていたが，現状保存が決定したため未調査である。

（P.43）

以上総括すると，今回調査した区域は古墳と横穴墓が密集する地帯で，古曾志地区の宍道湖北岸に密集する古墳群の中では最南端の宍道湖岸に位置することになる。その中でも釜代1号墳は古曾志地区では前期古墳の初例となり，これまで本地域は古墳時代中期を中心とする大型古墳が密集する地域として知られてきたが，それが古墳時代前期にまで遡ることになり，古曾志地区では古墳時代前期の「釜代1号墳」から中期前半代とされる「丹華庵古墳」，中期後半代とされる「古曾志大塚1号墳」へ，そして中期末の「古曾志大谷1号墳」へと，約1世紀にも及ぶ系譜が辿れることになる。

被葬者の性格については不明な点が多く，鹿島町講武平野から宍道湖北岸（旧秋鹿郡と島根郡の一部）にかけて「狭田（佐太）之國」として捉えられている地域の中では，主体部に礎床や礎檣状の施設（古曾志大谷1号墳前方部埋葬施設例）を使うのが一般的であったとされている中でなぜ粘土帯を採用したのかという点と共に今後更に検討を重ねて解明しなければならない課題であるので，現時点では考察を加えないが，いずれにしても粘土帯の発見は出雲地方東部では初例となるため，貴重な資料となることは事実であり，副葬品の優位性や主体部規模の大きさは，被葬者の特殊性を物語るもの

であり、また単位地域内において卓越した階層の人物であったことを窺わせるものである。

出雲地方では、中期古墳のあり方から後代の「山代二子塚古墳」、「大念寺古墳」に代表される東西の2大覇権成立前の緩やかな「首長連合」が想定されているが、古曾志地区において古墳時代中期に活躍した首長は、決して突如として現れたのではなく、その先駆となった基盤が既に存在していたことを窺わせるもので大変興味深い。また、他地域の事例にも見られるように、斐伊川中流域においてはこれまで古墳時代前期に「神原神社古墳」や「松本1号墳」などの大規模な古墳が突如として現れるように言われてきた地域でも、近年の調査の結果により、それを遡る弥生時代後期から古墳時代前期にかけての大規模な墳墓群である「神原正面遺跡」が発見されたことにより、首長が在地において成立するだけの基盤が既にあったことが判明したように、古曾志地区においても更に弥生時代にまで遡る首長の成立基盤の存在を窺わせる遺跡が今後発見される可能性は大いにあると言える。それだけにまだまだ未解明な部分は多いが、今後の調査例の増加に期待するしかない。

最後に、釜代1号墳、北小原3,4号穴、横穴墓推定地を含むB、C、D地点は、文化財側と工事側による度重なる協議の末に現地保存されることが決定したことは、貴重な文化財を後世に残すという点で大変有意義であった。これはまさに県土木建築事務所と県道路課の文化財に対する深い理解と、県教育委員会ならびに地元住民の方々の協力の賜物であり、ここに記して感謝の意を申し上げる次第であります。



圖 版





発掘調査地遠景(C地点)



発掘調査地遠景(A~B地点)



寺津11号墳主体部検出状況(東方より)



礎床検出状況(東方より)



礎床頭位推定位置近景



寺津11号墳完掘状況(西方より)



B地点T-9完掘状況



B地点T-10完掘状況



C地点釜代1号墳調査前遠景(東方より)



釜代1号墳調査前近景(北方より)



第1主体部上土器検出状況(東方より)



第1主体部上土器検出状況(鼓形器台, 小形丸底壺)



第1主体部上土器検出状況(高坏)



第1主体部上土器検出状況(直口壺)



第1主体部上土器検出状況(直口壺)



第1主体部内サブトレ(粘土層)状況



第2主体部粘土櫛部断面状況



左:第1主体部落込み土完掘, 右:第2主体部落込み土検出



第2主体部墓壙面ビット検出状況(東方より)



第2主体部粘土櫛検出状況(北方より)



第2主体部棺内被覆粘土落込み状況(北方より)



鏡・玉類検出状況(西方より)



第2主体部棺内被覆粘土半掘状況(東方より)



第2主体部棺内完掘状況(東方より)



鏡・玉類検出状況



鏡面下部遺存木質検出状況



T-4調査前(東方より)



T-4北小原3号穴



T-4北小原3号穴前庭部土層堆積状況



T-4北小原3号穴(羨門部閉塞状況)



T-4北小原3号穴玄室内状況



No.1 鼓形器台



No.1 鼓形器台穿孔部



No.2,3 高环



No.8 高环



No.4 高环



No.7 高环



No.5 高环



No.6 高环



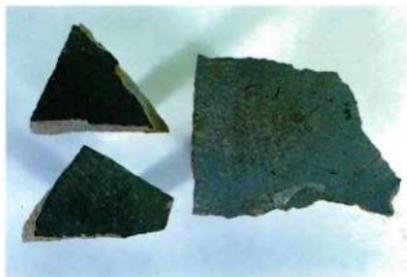
No.9 小形丸底壺



No.10 直口壺



No.11 鼓形器台片



No.12~14 須惠器片



鏡背部



鏡面部



鏡背部赤色顔料



鏡面部布目痕跡



釜代1号墳出土内行花文鏡



宇部市松崎古墳出土内行花文鏡(参考資料)



鈕座



鏡面下遺存木質



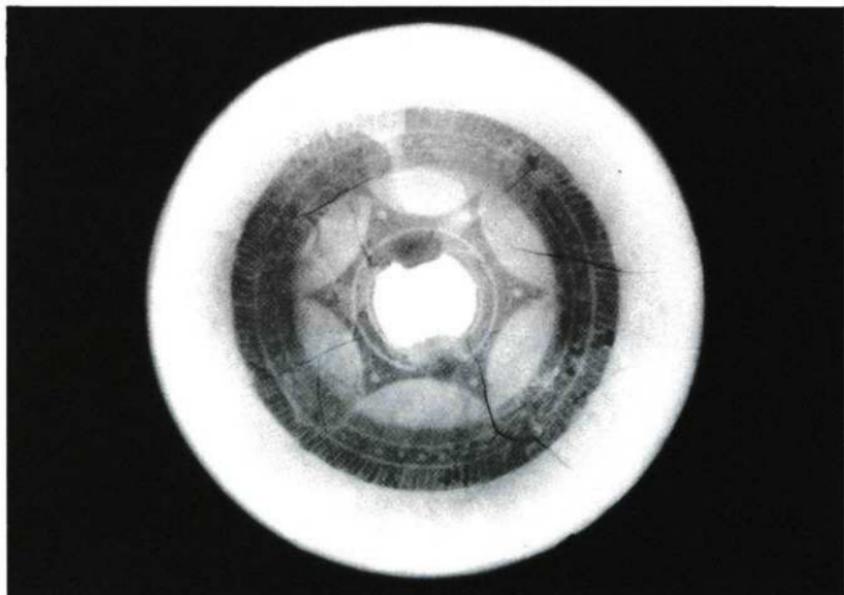
No.68 勾玉



No.68 勾玉



No.1~67 ガラス小玉



X線写真



釜代1号墳外発掘調査報告書 I

1994年3月

発行 榑松江市教育文化振興事業団

印刷 有限会社 谷口印刷  
松江市母衣町89